

寺町旧域・法成寺跡

—東桜町の調査—

2016年

古代文化調査会

例　　言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市上京区寺町通広小路下る東桜町9において、野村不動産株式会社によるマンション建設に伴い実施した寺町旧城・法成寺跡（文化財保護課番号14S526）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は野村不動産株式会社より委託を受けた古代文化調査会の小松武彦が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は小松武彦がおこなった。
5. 図面及び遺構・遺物の整理、遺構の製図は小松がおこない、遺物の実測は板谷桃代、水谷明子が担当した。
6. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。
記載した数値はm単位で、水準はT.P.（東京湾平均海面高度）である。
7. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の25,000分の1（京都東北部）、京都市都市計画局発行の2,500分の1の地図（御所）を調整し、使用した。
8. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
9. 遺物番号は実測図・写真ともに共通している。
10. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

赤松佳奈 安藤哲郎 家原圭太 伊賀哲平 植村まどか 馬瀬智光 岡山耕平 奥井智子
織田大樹 梶川敏夫 神田周作 橋田宗勝 熊井亮介 熊谷舞子 黒須亜希子
田中洸一郎 坪田 剛 鈴木久史 長久保千馬 西森正晃 新田和央 平野哲也
藤原武士 堀 大輔 水野克明 宮原健吾 脇野 順 李 永一
(株)明輝建設 (株)大高建設 (公財)京都市埋蔵文化財研究所 (株)京都遺跡調査会
野村不動産(株)

本文目次

寺町旧域・法成寺跡

I 調査の経過	1
II 遺構	4
III 遺物	13
IV まとめ	23

図版目次

図版1	遺跡 第1面遺構実測図
図版2	遺跡 第2面遺構実測図
図版3	遺跡 第3面遺構実測図
図版4	遺跡 確認トレンチ1・2位置図
図版5	遺跡 1 第1面全景（北東から） 2 第2面全景（北東から）
図版6	遺跡 1 第3面全景（北東から） 2 確認トレンチ全景（北西から）
図版7	遺跡 1 集石10（北から） 2 水琴窟22（北から） 3 集石88（北から） 4 水琴窟22断面（南から） 5 石敷45（北から） 6 雨落ち溝54・集石92（北から）
図版8	遺跡 1 屏1（北から） 2 屏2（北から） 3 屏3（西から） 4 柱穴112（南から） 5 柱穴120（南から）

- 図版9 遺跡 1 埋納土壙100断面（南から）
 　　2 土壙201の錢貨出土（南から）
 　　3 井戸212（北から）
 　　4 集石219（南から）
 　　5 確認トレンチ1（北から）
 　　6 確認トレンチ1東壁断面（西から）
 　　7 確認トレンチ2南壁断面（北から）
- 図版10 遺物 土壙14・水琴窟22・土壙26・埋納土壙100
- 図版11 遺物 土壙14・土壙26・埋納土壙100

挿 図 目 次

図1 調査地点位置図.....	1
図2 調査地位置図.....	2
図3 平安京条坊と調査地位置図.....	2
図4 西壁断面実測図.....	5
図5 南壁断面実測図.....	5
図6 確認トレンチ1東壁断面実測図.....	6
図7 確認トレンチ2南・西壁断面実測図.....	6
図8 集石10実測図.....	7
図9 水琴窟22実測図.....	7
図10 石敷45実測図.....	7
図11 集石88実測図.....	7
図12 雨落ち溝54・集石92実測図.....	8
図13 堀1実測図.....	9
図14 堀2実測図.....	9
図15 堀3実測図.....	9
図16 埋納土壙100実測図	10
図17 井戸212実測図	11
図18 集石219実測図	11
図19 磚のサンプル.....	12
図20 土壙14出土土器実測図.....	14
図21 土壙14出土玩具実測図.....	15
図22 水琴窟22出土土器実測図.....	15
図23 土壙26出土土器実測図.....	15

図24 土壙146出土土器実測図	16
図25 埋納土壙100出土土器実測図	16
図26 土壙163出土土器実測図	17
図27 土壙201出土土器実測図	17
図28 2面掘下げ・確認トレンチ2出土土器実測図	18
図29 棟丸・軒瓦・軒棟瓦拓影・実測図	19
図30 軒瓦・丸瓦・熨斗瓦拓影・写真・実測図	20
図31 銭貨拓影図	21
図32 金属・石・ガラス製品実測図	22
図33 「洛中絵図」寛永14年（1637）（京都大学附属図書館所蔵）	24
図34 「新改内裏之図」延宝5年（1677）	24
図35 「新版増補京絵図新地入」宝永6年（1709）	25
図36 「増補再版京大絵図」寛保元年（1741）	25
図37 「京大内裏絵図」天明火災（1788以後）（京都大学附属図書館所蔵）	26
図38 「天保八年補刻 禁闈内外全圖」天保8年（1837）	26

表 目 次

表1 遺構概要表	4
表2 碑の組成一覧表	12
表3 遺物概要表	13

寺町旧域・法成寺跡

I 調査の経過

調査に至る経緯

調査地は、京都市上京区寺町通広小路下る東桜町9である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である法成寺跡及び寺町旧域に当たる。2015年1月、当地に野村不動産株式会社によるマンション建設の計画がなされた。建設地は旧法成寺境内域の中央北部付近に推定されるところで、法成寺の主要な伽藍が想定されるところでもあり、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもと、施主との協議によって、古代文化調査会が発掘調査を行うことになり、2015年3月18日より発掘調査を開始することとなった。

調査の経過

調査地は、寺町旧域・法成寺跡に当る。寺町旧域は豊臣秀吉が行った都市改造事業の一環で、

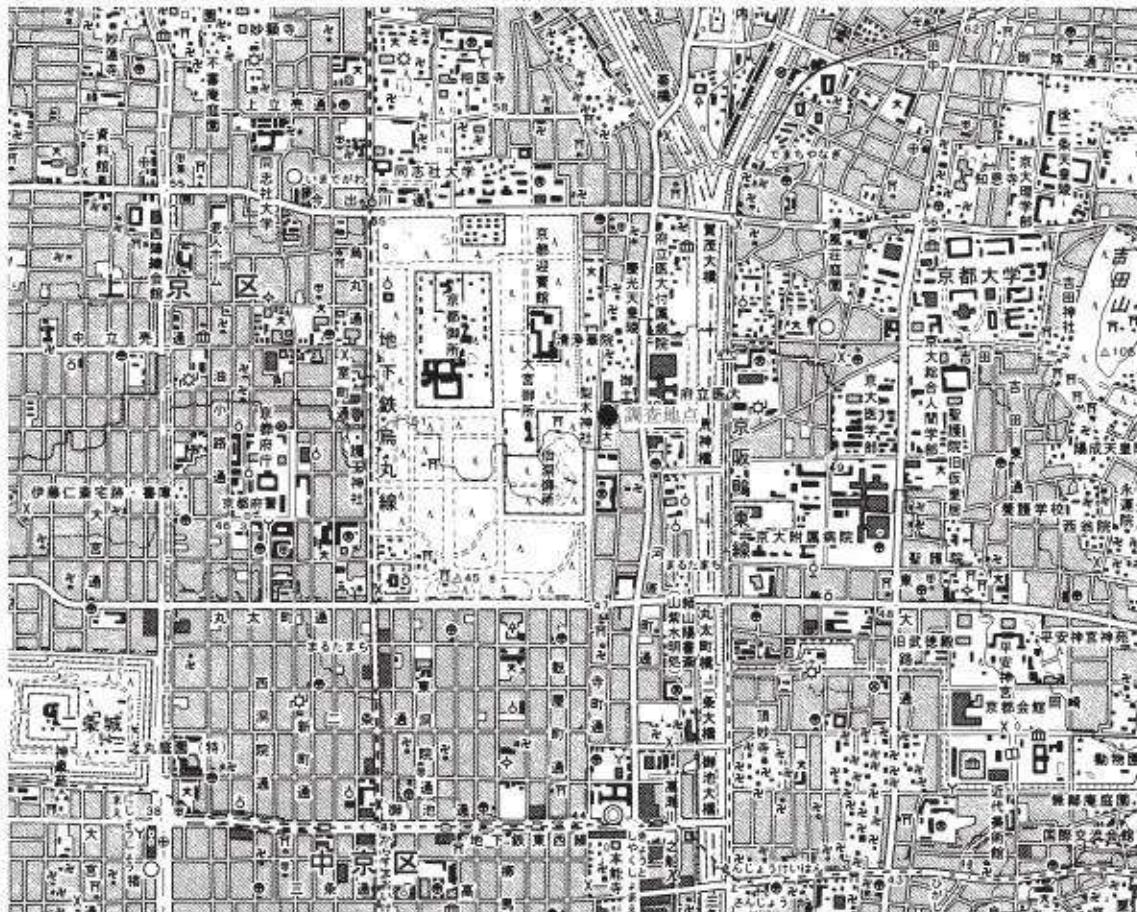


図1 調査地点位置図 (1/25,000)

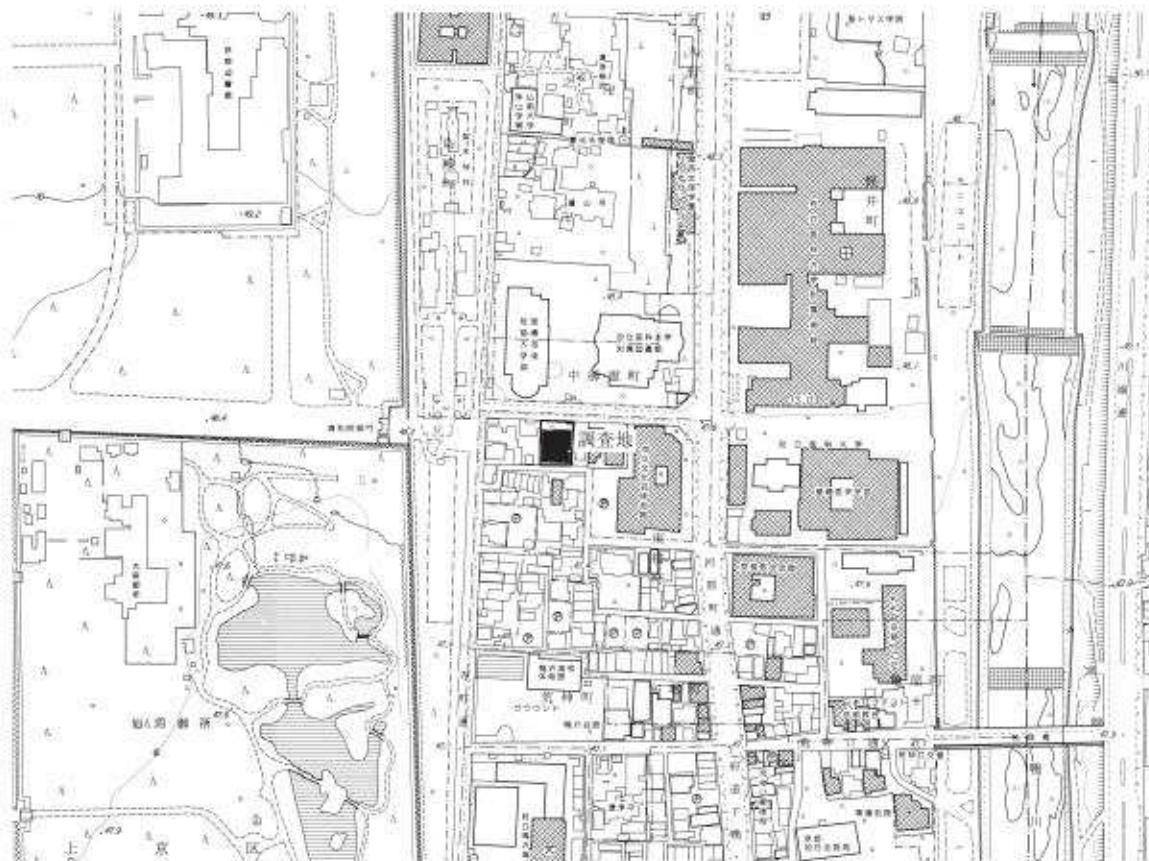


図2 調査位置図 (1/5,000)

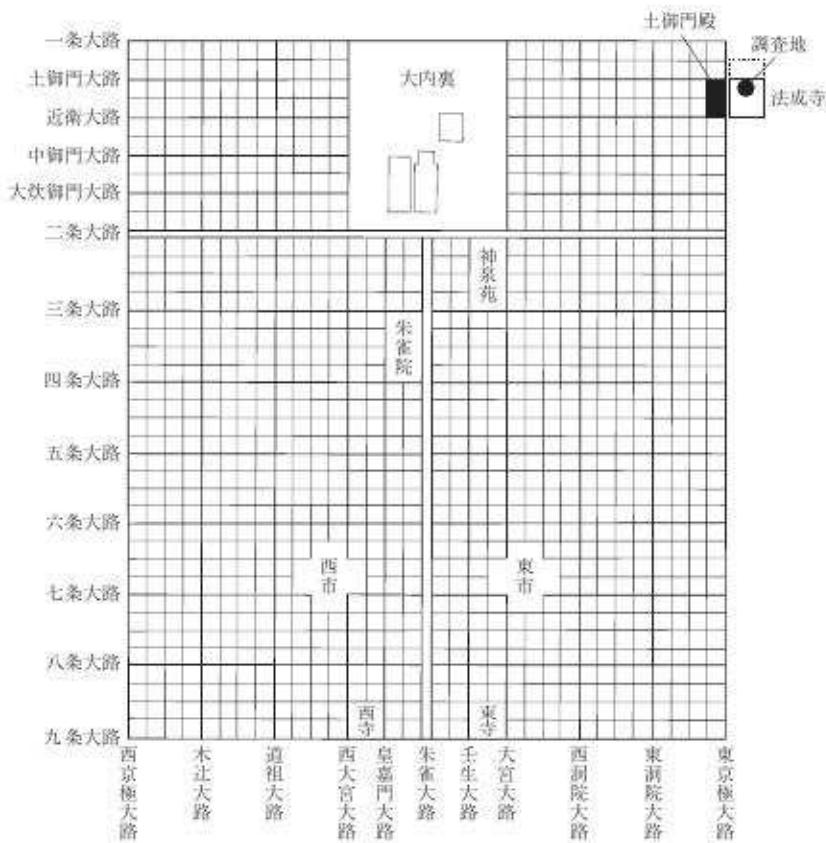


図3 平安京条坊と調査位置図

天正十九年（1591）の御土居の築造と寺社町の形成がある。寺町通は南北通であり、北は紫明通から南は五条通までの間に寺社を集めて造られた通で平安京の東京極大路とも重複する。ここ御所周辺地も、天正十七年（1589）の御所新造に伴い、皇族や公家の屋敷が再編された。当地は江戸時代前期には、「清和院・知恩寺・女院御所様、本院様御家中」などの寺院と皇太后の屋敷であり、江戸時代中期から幕末には、「百万遍屋敷・葉室・藤嶋・高橋・正親町殿」などの寺院と公家屋敷と推定される。

^{第1} 法成寺は、藤原道長の晩年である平安時代中期の寛仁三年（1019）に建立された。道長の住居である土御門殿の真東に位置し、西は東京極大路、北は土御門大路、南は近衛大路の東西二町、南北二町で、後に、南北三町と推定されている。「九体阿弥陀堂」をはじめとする十斎堂、法華堂、西北院、五大堂、鐘楼、薬師堂などの堂宇と庭園からなる浄土式寺院である。道長の死後、天喜六年（1058）火災で全焼したが嫡男頼通が直ちに再建した。その後、師実に引継がれるが藤原氏の衰退と共に鎌倉時代末期には廃絶する。当地は、永承五年（1050）に建立された「講堂」に推定される。

調査は平成27年3月18日から同年6月23日までの間、実働68日を要した。調査面積は462m²、調査の方法は、（公財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系VIのグリッドを使用し、調査区の北東角を原点（X = -108,336 Y = -21,152）とする、東西方向にアラビア数字、南北方向にアルファベットを記号として付し、4 mメッシュのグリッドを基本として遺構・遺物の記録をとる方法をとった。

II 遺構

地表下0.9mまで重機掘削し、以下人力掘削で3面の調査を行った。第1面は、地表下0.7~0.8mにおいて確認したにぶい黄褐色砂・礫層上面で、江戸時代末期から後期の石組井戸、水琴窟、集石、雨落ち溝、焼土壙、土壙などを検出した。第2面は地表下0.8~1.1mのにぶい黄褐色粗砂~砂礫層上面で、江戸時代前期から中期頃の南北方向の塀2基、南側で東西方向の塀1基、集石1、井戸、埋納土壙などを検出した。第3面では鴨川の氾濫痕を検出した。検出した遺構の総数は226基である。

基本層序（図4~7、図版9の6・7）

調査地の標高は48.7~48.4mで西から東へ、北から南へ緩やかに傾斜している。層序（西壁断面）は地表下0.1~0.2mが近現代の盛土である。地表下0.4~0.7mまでが明治時代以降の盛土・搅乱である。地表下0.7~1.0mまでが第13~15層の暗褐色砂泥・礫混、にぶい黄褐色砂泥、にぶい黄褐色砂・礫混で、江戸時代後期の整地層である。地表下1.0~1.3mの第16・17・19層の黒褐色砂礫・泥混、にぶい黄褐色粗砂で、江戸時代前期の包含層である。地表下1.3~1.5mは第1・6層（確認トレンチ2南壁断面）のにぶい黄褐色砂~砂礫層で、室町時代後半の氾濫堆積である。確認トレンチ1の地表下2.8mでか確認した第10層の褐色砂礫層は堅く詰まった層で、地山の可能性がある。確認トレンチ1の第5~7層・確認トレンチ2の第5・7・8・9層は北東から北西方向に流れる流路である。

江戸時代後期から末期の遺構（第1面）（図8~12、図版1・5・7）

検出遺構は井戸、水琴窟、集石、雨落ち溝、石敷、焼土壙、土壙などである。

集石10（図8、図版7の1）

調査区北西で検出した集石である。直径0.9m、深さ0.35mの円形を呈する。埋土は5~30cmの大河原石が詰まっている。雨水の排水施設か灯籠などの据付石かと思われる。

土壤14

調査区北東隅で検出した土壤である。南北1.5m、東西3.6m以上で東壁へ延びる。深さ1.7mを測り、方形を呈する。埋土は暗褐色泥砂・礫混層で江戸時代末期の陶磁器などが多量に出土し

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代後期（第1面）	集石10・88・92、土壙14・26、水琴窟22、井戸25、石敷45、雨落ち溝54	
江戸時代前期~中期時代（第2面）	塀1~3、埋納土壙100、土壙146、土壙163・201、井戸212・233、集石219	
室町時代（第3面）	洪水堆積層、流路	鴨川の氾濫層

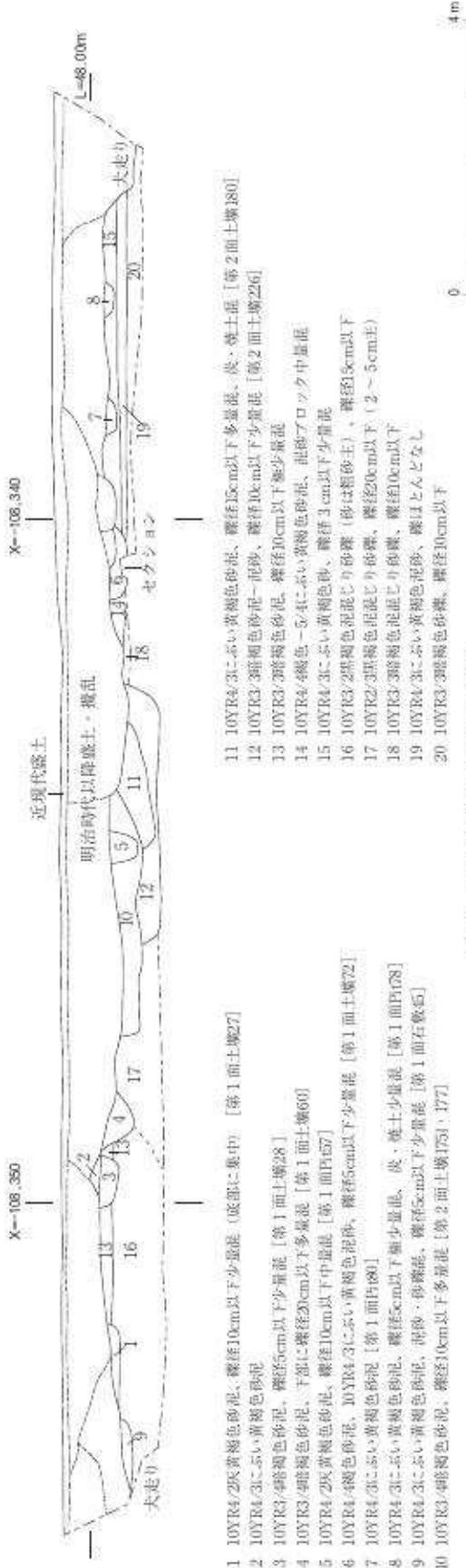
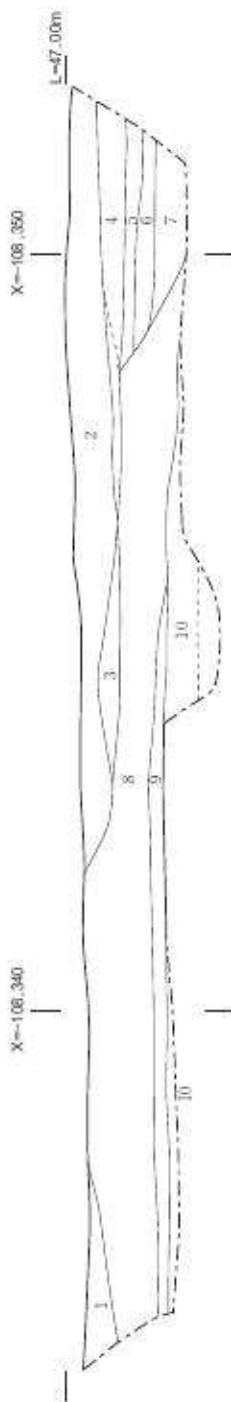


図4 西壁断面実測図 (1/100)

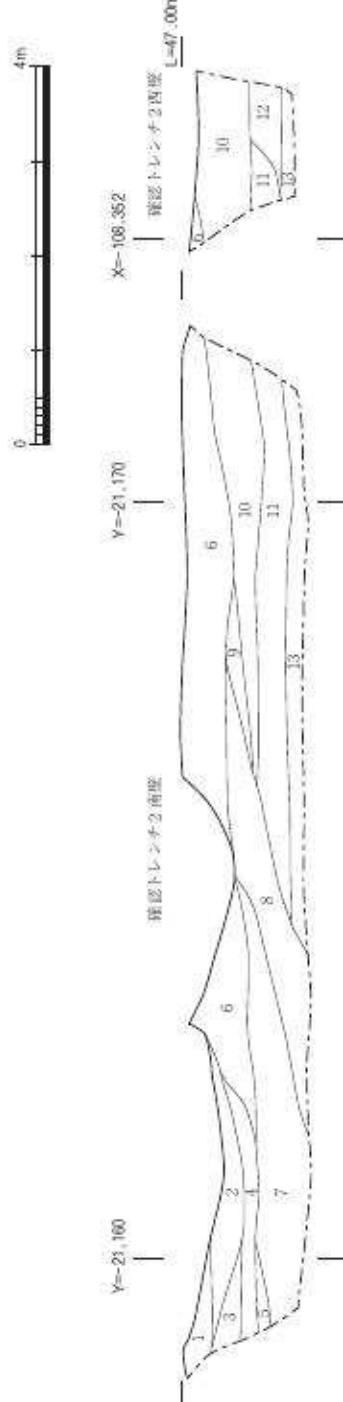


図5 南壁断面実測図 (1/100)



1 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層（細砂土）、礫径15cm以下中量混
2 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層（砂は細砂土）、礫径20cm以下
3 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層、礫径1cm以下以下少量混
4 JOYR3/3L褐色色砂層（細砂土）、礫径5cm以下中量混
5 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層（細砂土）、礫径20cm以下（5cm以下主）中量
混（20cm前後の礫が層の最下部に水平に存在）

図6 確認トレーンチ2東堀断面実測図（1/100）



1 JOYR3/3L褐色色砂層、礫径10cm以下
2 JOYR3/3L褐色色砂層、礫径20cm以下、砂は粗砂土（1.と似る）
3 確認トレーンチ1東堀 4
4 梯器トレーンチ1東堀 5
5 梯器トレーンチ1東堀 6
6 JOYR3/3L褐色色砂層～2次黄褐色砂層一帶、砂は粗砂土
7 確認トレーンチ1東堀 7
8 JOYR3/3L褐色色砂～砂層、礫径3cm以下

6 JOYR3/3L褐色色砂層、礫径3cm以下（1cm以下主）
7 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層、礫径10cm以下（3cm以下主）、10cm近くはごく少ない）中量混
8 JOYR3/4時褐色砂層（粘土・小量主）、礫径30cm以下
9 JOYR5/4L-5Lの黄褐色砂層（砂は粗砂土）、礫径20cm以下（5cm以下主）中量混
10 7SYR4/6褐色色砂層（砂は粗砂土）、礫径15cm以下（礫層から下はJOYR2/1黑色に変色）

6 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層、礫径10cm以下
7 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層、礫径10cm以下（10cm以上多量）、砂は粗砂土
8 JOYR3/4時褐色砂層一帶、礫径10cm以下、10cm前後が角質も水平に並び、間に1cm
以下の小隙がある
9 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層、礫径10cm以下
10 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層、礫径10cm以下、10cm以上多量
11 JOYR4/4褐色砂層一帶、礫径10cm以下、10cm前後が角質も水平に並び、間に1cm
以下の小隙がある
12 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層、礫径15cm以下
13 JOYR4/3L-5Lの黄褐色砂層一帶、礫径20cm以下、上の層に似る、上部境界下へ下
1. 10~20cmの大きな隙が目立つ

図6 確認トレーンチ2東堀断面実測図（1/100）

図7 確認トレーンチ2南・西壁断面実測図（1/100）

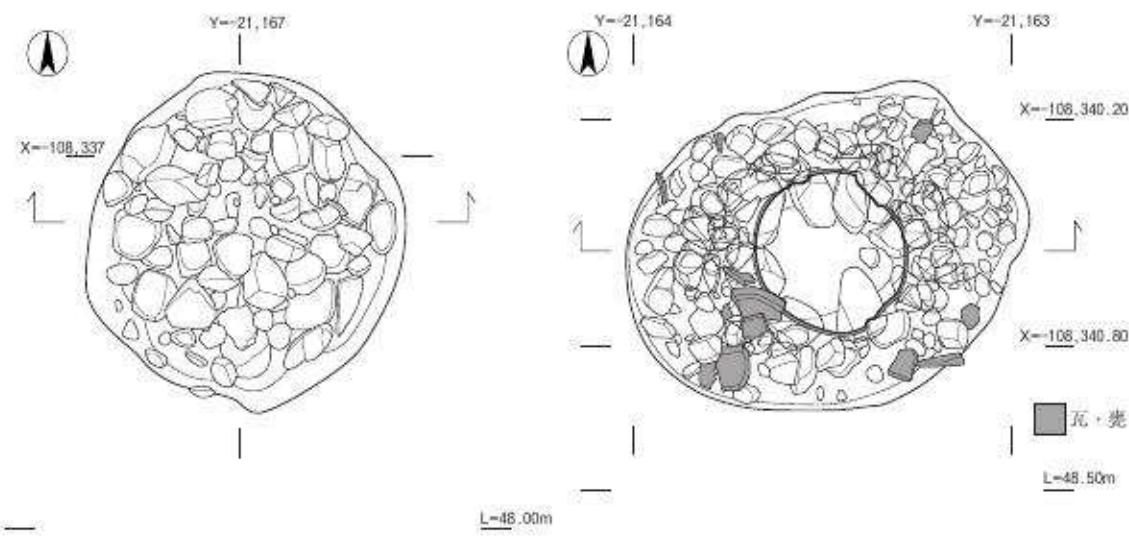
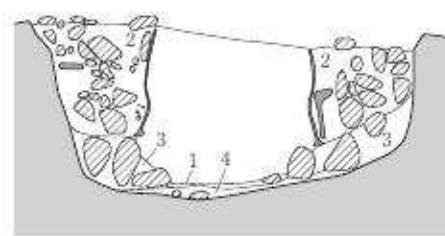


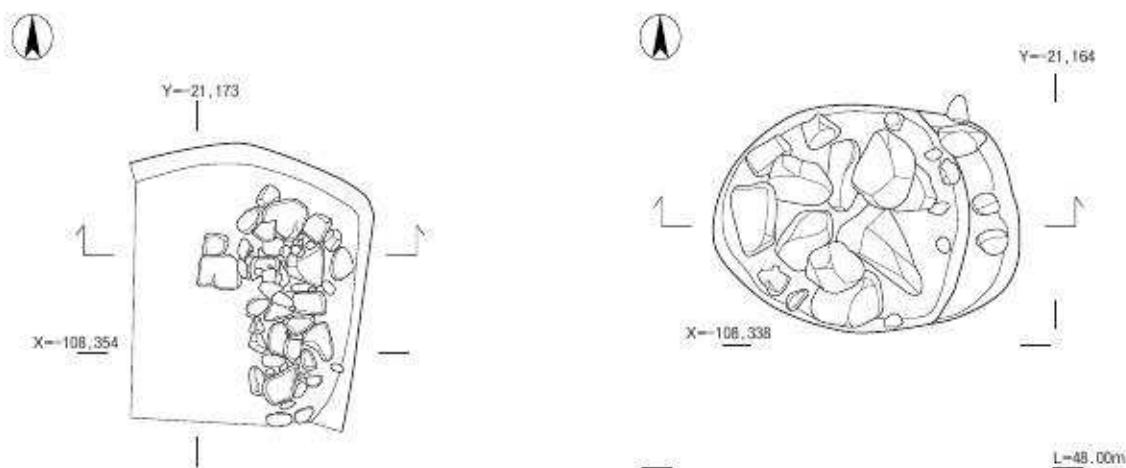
図8 集石10実測図 (1/20)

0 50cm



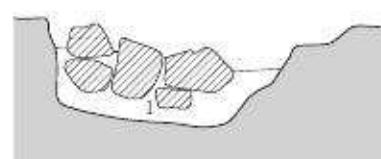
- 1 10YR3/2灰褐色泥土
2 10YR4/2灰黄褐色泥混じり砂疊、疊18cm以下。瓦混
3 10YR4/2灰黄褐色～4/3にぶい黄褐色砂疊（粗砂多い）、疊5cm
以下中量混
4 10YR3/2灰褐色泥土、疊8cm以下少量混

図9 水琴窟22実測図 (1/20)



1 10YR4/2灰黄褐色砂疊

図10 石敷45実測図 (1/20)



1 10YR4/2にぶい黄褐色砂疊

図11 集石88実測図 (1/20)

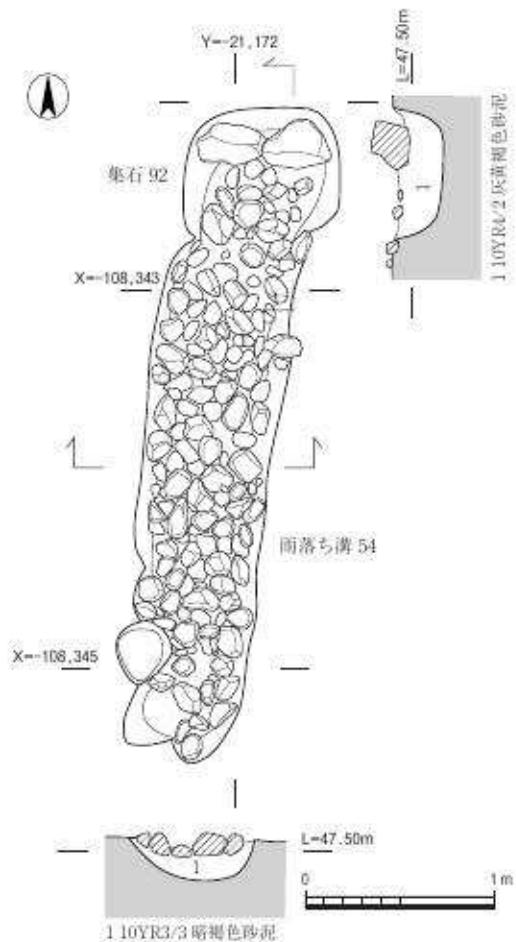


図12 雨落ち溝54・集石92実測図 (1/40)

調査区南西隅で検出した石敷である。検出長南北1.2m、東西0.8mで北・西側は攪乱を受けているが南側は調査区外に延びる。石が平坦に敷かれている。延段の可能性がある。

雨落ち溝54 (図12、図版7の6)

調査区中央の西壁側で検出した雨落ち溝である。南北2.5m、東西0.8m、深さ0.3mである。遺構内に20cm大の河原石が多量に充填されていた。付随する建物は西側の調査区外にあると思われる。

集石88 (図11、図版7の3)

調査区北寄りの地点で水琴窟22の北西で検出した集石である。直径0.5m、深さ0.4mの円形を呈する。埋土には15cm大の河原石が詰まっている。水琴窟22に隣接していることから灯籠などの据付石かと思われる。

集石92 (図12、図版7の6)

雨落ち溝54の北側に接する集石である。掘形0.7~0.75m、深さ0.25mで方形を呈する。北側に30cm大の花崗岩が東西に2石並び、南側は10~20cm大の河原石が多数埋められている。雨水の排水施設で雨落ち溝54と一体の遺構と思われる。

た。

水琴窟22 (図9、図版7の2・4)

調査区北側で検出した水琴窟である。掘形径0.85~1.0m、深さは検出面から0.5mで梢円形を呈している。信楽焼の甕を俯せて置き、底と周りに3~15cm大の石を充填する。甕の中は空洞である。

井戸25

調査区南東隅で検出した石組井戸である。掘形直径1.5m以上、大半は東壁へ延びる。深さ0.8m以上で底部は未確認である。石組は20~30cm大の河原石を円形に積む。内径1.0m程である。埋土は黒褐色泥砂で江戸時代末期の遺物が出土した。

土壙26

調査区中央部で検出した土壙である。南北26m以上、東西21m、深さ0.3~1.5mで南へ向かって深くなり、形状は不定形である。埋土はにぶい黄褐色泥砂で、炭・焼土などが多量に含まれる。江戸時代末期の陶磁器などが多量に出土した。

石敷45 (図10、図版7の5)

調査区南西隅で検出した石敷である。検出長南北1.2m、東西0.8mで北・西側は攪乱を受けているが南側は調査区外に延びる。石が平坦に敷かれている。延段の可能性がある。

雨落ち溝54 (図12、図版7の6)

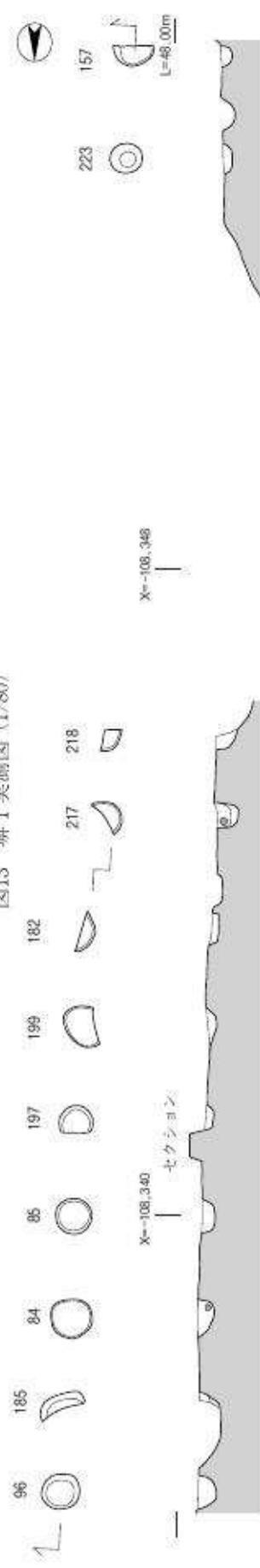
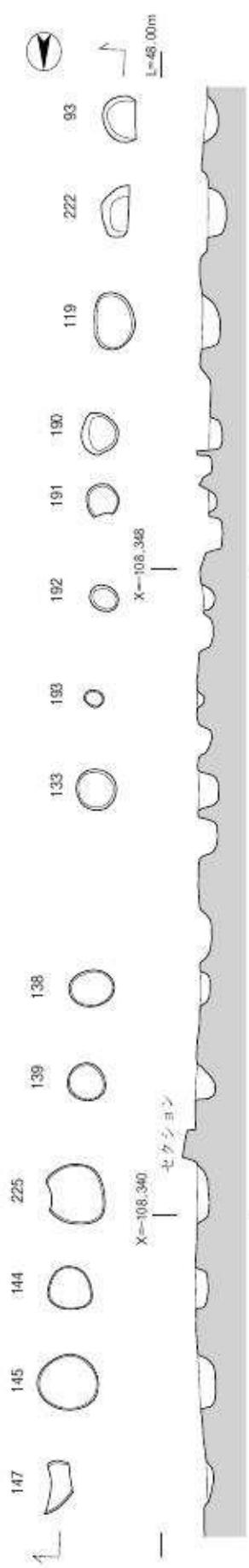
調査区中央の西壁側で検出した雨落ち溝である。南北2.5m、東西0.8m、深さ0.3mである。遺構内に20cm大の河原石が多量に充填されていた。付随する建物は西側の調査区外にあると思われる。

集石88 (図11、図版7の3)

調査区北寄りの地点で水琴窟22の北西で検出した集石である。直径0.5m、深さ0.4mの円形を呈する。埋土には15cm大の河原石が詰まっている。水琴窟22に隣接していることから灯籠などの据付石かと思われる。

集石92 (図12、図版7の6)

雨落ち溝54の北側に接する集石である。掘形0.7~0.75m、深さ0.25mで方形を呈する。北側に30cm大の花崗岩が東西に2石並び、南側は10~20cm大の河原石が多数埋められている。雨水の排水施設で雨落ち溝54と一体の遺構と思われる。



江戸時代前期から江戸時代中期の遺構（第2面）（図13～18、図版2・5・8）

検出遺構は塀、井戸、集石、ピット、土壙などがある。

塀1（図13、図版8の1）

調査区の東側で検出した南北方向のピット列である。検出長は16.5mで北・南側の調査区外に延びる。掘形径は0.3～0.6m、深さは0.1～0.3mで平面形は円形や方形などばらつきがある。柱間は1.2m前後であるがピット133とピット138の間は2.4mである。また、ピットの前後にもピットが見られることから造り替えが行われたと考える。埋土には焼土、炭などが混入する。出土遺物から江戸時代中期以降の遺構と思われる。

塀2（図14、図版8の2）

塀1の約10m西で検出した南北方向のピット列である。検出長は約15mで北・南側の調査区外に延びる。南側は一部搅乱を受け欠損している。掘形径は0.3～0.4m、深さ0.1～0.3m前後である。平面形状は円形ないし方形を呈する。埋土は塀1と同じく、焼土、炭などが含まれており、同時期と思われる。

塀3（図15、図版8の3～5）

調査区南側で検出した東西方向の柱穴列である。中央部は搅乱されているが、搅乱部を含めると検出長は19.5mで東・西側の調査区外に延びる。掘形径0.6～0.8m、深さ0.4～0.6mで平面形は方形を呈する大型の柱穴である。柱間は1.8mで柱穴112・120には柱当りが確認された。塀1との切合い関係から塀3が古い、出土遺物から江戸時代前期に属する遺構と思われる。

埋納土壙100（図16、図版9の1）

調査区北東で検出した土壙である。掘形は直径0.5～0.6m、深さ0.25mの円形で胞衣壺が埋納されていた。掘形内から「開元通宝・康熙通宝」が出土した。

土壙146

調査区東側で検出した土壙である。南北1.9m、東西2m以上、深さ0.6mで不定形である。埋土から江戸時代中期の土師器がまとまって出土した。

土壙163

南西側で検出した土壙である。長軸1.1m、短軸1.1m、深さ0.4mで方形を呈する。埋土は暗褐色泥砂層で江戸時代前期後半の土師器、輸入陶磁器が出土した。

土壙201（図版9の2）

土壙163の南東側に隣接する土壙である。南北1.0m、東西1.1m、深さ0.5mで不定形である。埋土はにぶい黄褐色泥砂と炭層が互層に堆積する。江戸時代前期前半の土師器、輸入磁器などと共に古寛永通宝が19枚出土した。

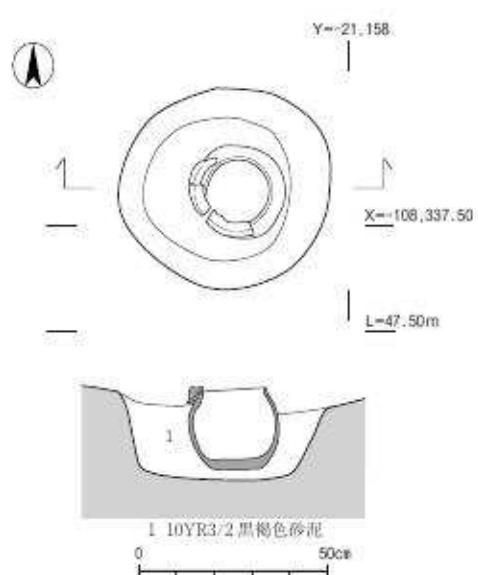


図16 埋納土壙100実測図（1/20）

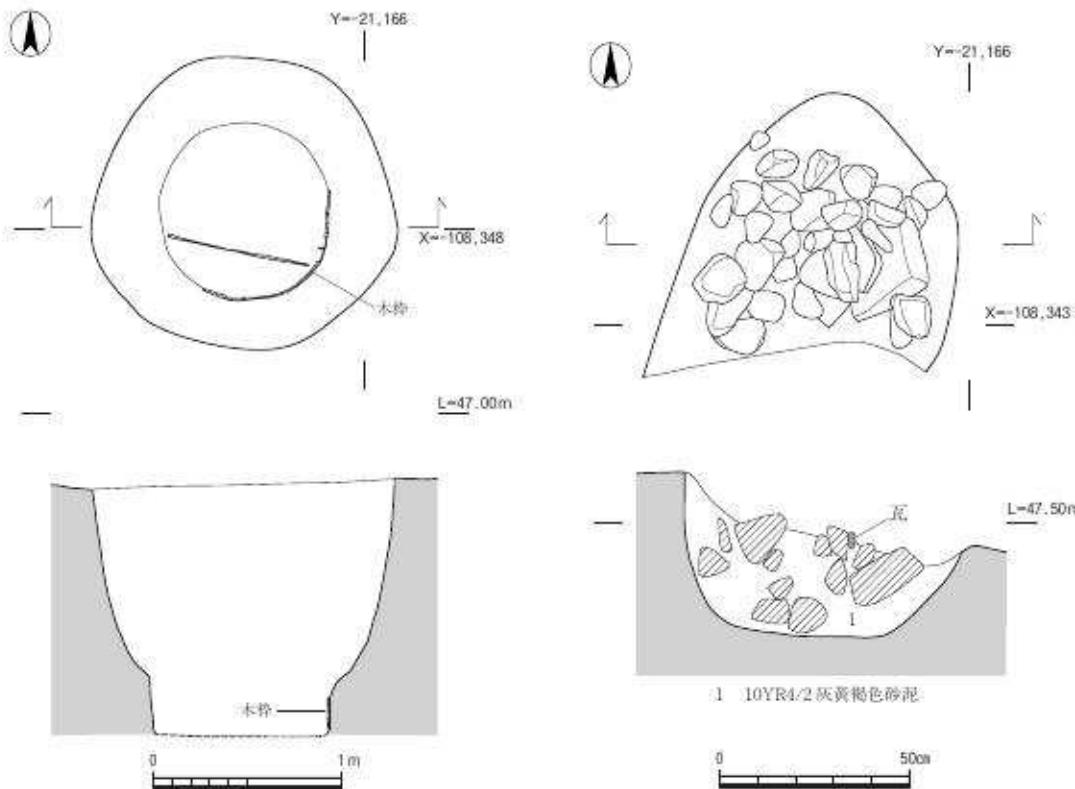


図17 井戸212実測図 (1/40)

図18 集石219実測図 (1/20)

井戸212 (図17、図版9の3)

調査区南西側で検出した素掘井戸である。掘形直径1.6m、深さ1.6m以上で底は未確認である。形状は円形を呈する。検出面から1.2mのところで木枠が残存していた。埋土は暗オリーブ褐色砂礫層で江戸時代前期の瓦などが出土した。

集石219 (図18、図版9の4)

調査区中央西側で検出した集石である。径約0.8~0.9m、深さ0.25mで橢円形を呈する。埋土内には河原石が多く見られたことから排水施設の可能性がある。江戸時代中期の遺構である。

井戸233

調査区中央の南壁際で検出した井戸である。堀方は東西約3.0m、南北1.8m以上、南半は調査区外である。深さ1.5m以上で底は未確認である。埋土内に石が多く確認されたことから石組井戸と思われる。江戸時代中期の遺物が出た。

室町時代の氾濫痕 (第3面) (図4~7、図版3・4・9の5~7、表2)

第3面は断面観察でのみ確認した。第2面から0.3~1.0m下の砂礫層下面に、5~20cm大の礫で覆うわれた面が調査区全体で確認された。この礫面が遺構面の可能性があるため、掘下げ精査を行ったが遺構を検出することができなかった。なお、この面の2ヵ所で礫をサンプリングし、¹³Cの組成調査を行った。その結果を表2に示した。

高野川水系¹³Cはチャート・砂岩・頁岩類が約90%で、石英斑岩・花崗閃綠岩・花崗斑岩・アブラ



図19 磯のサンプル

イトなどが約5%の割合で含まれるのが特徴である。加茂川水系はチャート・砂岩・頁岩が約90%で、緑色岩が約10%で含まれるのが特徴である。鴨川は高野川と加茂川が出合橋付近で合流し、南流する河川である。^{注4} 碰の組成も両河川が混じり合ったものとなる。今回のサンプリング調査では2ヵ所ともチャート・砂岩・頁岩類が約95%で、高野川の石英斑岩・花崗閃綠岩・花崗斑岩・アブライトと

加茂川の緑色岩が約5%となり、やや少ないが鴨川の特徴が現れている。このことから調査地が鴨川の氾濫堆積層であることが明らかになった。更に、下層遺構確認のため2ヵ所に逆「L」字の確認トレンチ1（東側）、2（南側）を設け、断割り調査を行った。確認トレンチ1で地表下2.8mにて地山と思われる堅く締まった褐色砂礫層を確認したが、遺構の痕跡は認められなかつた。弥生時代・平安時代から室町時代の遺物を包含する流路や洪水堆積を検出したのみである。

表2 磯の組成一覧表

粒径区分	砂 岩	チャート	泥 岩	緑色岩	石英斑岩	花崗閃綠岩	花崗斑岩	黒雲母花崗岩	アブライト	計
採取1	大	26	13	8	1	1		1		50
	中	27	15	2	1		3	1	1	50
	小	49	30	17	1		1		1	100
全 体	計	102	58	27	3	1	4	2	1	200
	百分率	51.00%	29.00%	13.50%	1.50%	0.50%	2.00%	1.00%	0.50%	100.00%

粒径区分	砂 岩	チャート	泥 岩	緑色岩	石英斑岩	花崗閃綠岩	花崗斑岩	黒雲母花崗岩	アブライト	計
採取2	大	32	12	6						50
	中	26	15	6			3			50
	小	40	40	18				2		100
全 体	計	98	67	30			3	2		200
	百分率	49.00%	33.5%	15.00%	0.00%	0.00%	1.75%	0.00%	0.00%	100.00%
全 体	合 計	200	125	57	3	1	7	2	1	400
	百分率	50.00%	31.25%	14.25%	0.75%	0.25%	1.75%	0.50%	0.25%	100.00%

III 遺 物

出土遺物は、整理箱にして143箱である。その内訳は陶磁器類が大半を占める。時代は江戸時代が最も多く、次に平安時代、鎌倉時代、室町時代となる。弥生時代のものも少量出土した。なお、時代区分は平安京の土器編年^{註5}をもとにした。

土器・土製品（図20～28、図版10・11）

土壤14（図20・21、図版10・11）

土師器皿S b (1)・同皿S (2～9)・同皿 (10)・同高坏 (11)・同塙壺身 (12)などがある。2～9は口径8.5～12cm、器高1.5～1.9cmである。底部はやや平坦で、体部は屈曲して外へ開く。凹線状圈線は加飾型である。1・2・4～7の口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使われたと思われる。10は口径19.4cm、器高3.9cmで大型の土師器皿Sに高台を付けたもので、お供え用の皿として使われたと思われる。11は器高4cm、皿部の口径は約3.6cmで小型の高坏で灯明皿の台として使われたと思われる。12は口径4cm、器高9cmで口縁部は内傾する。京都産である。国産磁器は肥前白磁小坏 (13)、肥前染付椀 (14～16・18)、同皿 (19・20)、同蓋 (23)、同一輪

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク 点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器2点		
平安時代	土師器、須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、軒瓦、瓦、錢貨		土師器3点、綠釉陶器1点、軒瓦4点、丸瓦1点、熨斗瓦1点、錢貨1点		
鎌倉時代	土師器、土師質土器、施釉陶器、磁器、焼締陶器				
室町時代	土師器、輸入磁器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、土製品		土師器2点、土製品1点		
江戸時代 前期～中期	土師器、土師質土器、輸入磁器、国産磁器、施釉陶器、焼締陶器、軒瓦、瓦、錢貨		土師器33点、土師質土器3点、輸入磁器1点、国産磁器3点、施釉陶器1点、焼締陶器3点、軒瓦6点、錢貨19点		
江戸時代 後期～末期	土師器、土師質製品、国産磁器、施釉陶器、焼締陶器、軒瓦、瓦、錢貨、玩具、金属製品、石製品、ガラス製品		土師器12点、土師質土器1点、国産磁器21点、施釉陶器7点、焼締陶器1点、玩具16点、軒瓦5点、錢貨1点、石製品1点、ガラス製品2点、金属製品4点		
合 計		157箱	156点(14箱)	143箱	0箱

*コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より14箱多くなった。

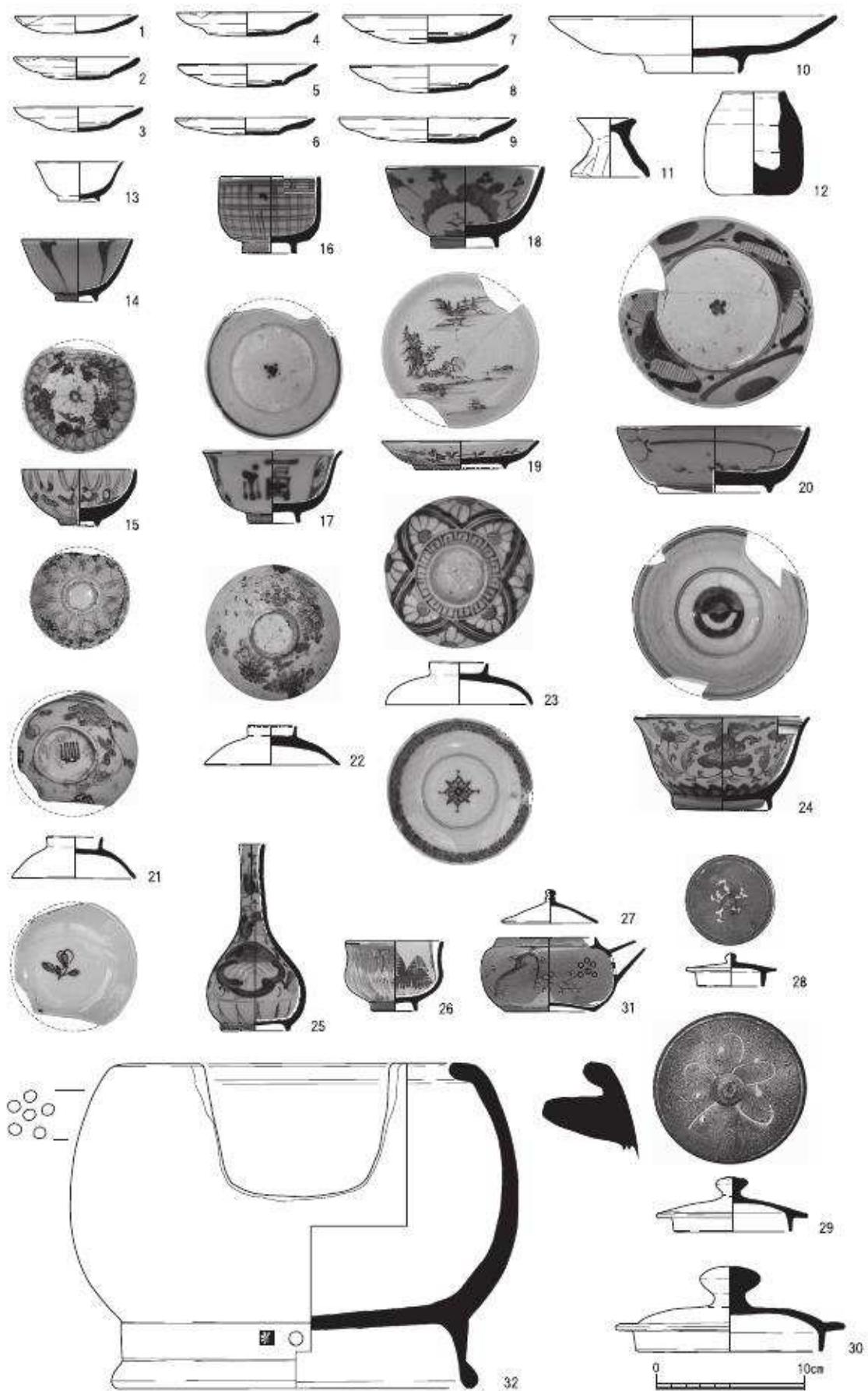


図20 土壙14出土土器実測図 (1/4)

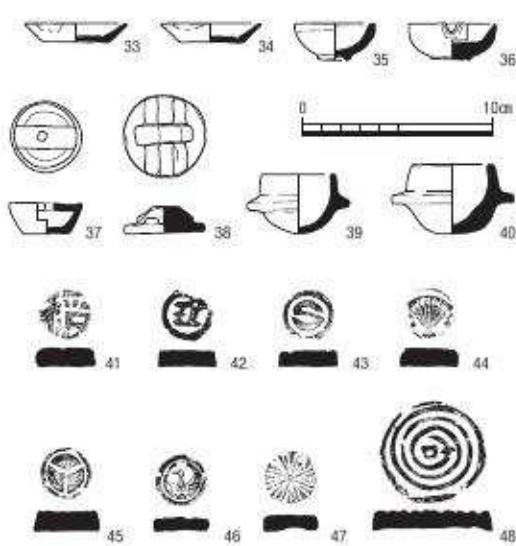


図21 土壌14出土玩具実測図 (1/4)

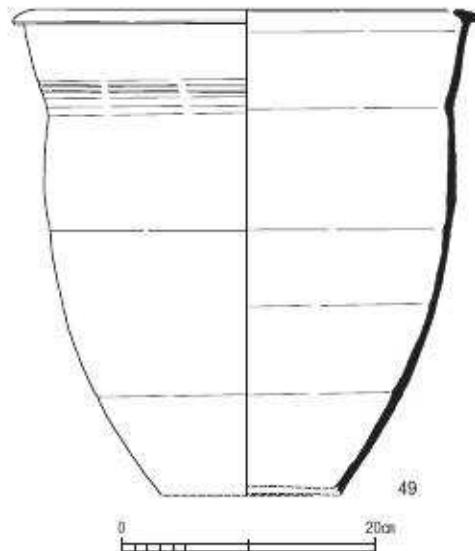


図22 水琴窟22出土土器実測図 (1/6)

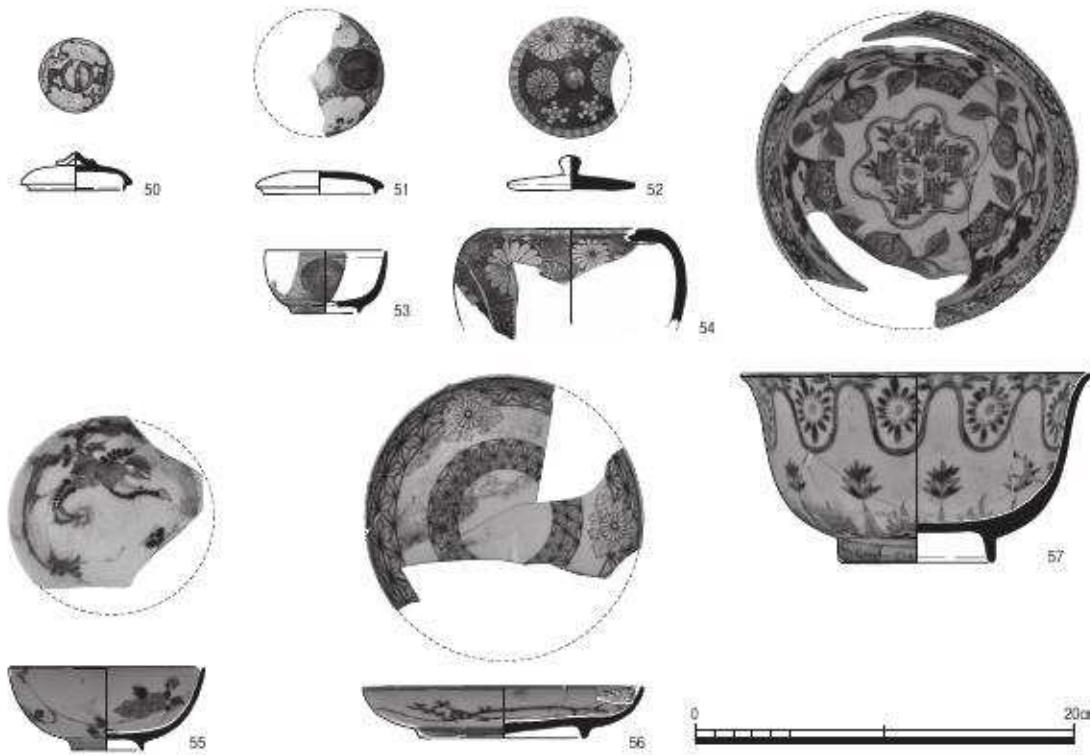


図23 土壌26出土土器実測図 (1/4)

指 (25)、同色絵 (22)、同色絵鉢 (24)、美濃染付椀 (17)・同蓋 (21)などがある。国産陶器は京焼系碗 (26)・同蓋 (27~30)・同急須身 (31)などがある。32は土師質風炉で口径24.5cm、器高23cmである。外面は丁寧な磨き調整が施され、梅文と思われる丸い通風用の穿孔6個が2ヶ所、高台部には丸い穿孔1個が3ヶ所と梅文の刻印が1ヶ所に施されている。玩具の33・34は口径5.25cm・5.35cmのミニチュアで辘轳土師器であるが形態は手捏ねと同じである。緑釉が施されたミニチュア椀 (35)・汁次 (36)・香立て (37)・羽釜蓋 (38)・羽釜身 (39・40)、泥面子の陰刻は、41は榎、42は丑、43は乙、44は扇、45は3つ扇、46は鳥、47は車輪、48は渦巻きである。XIV期

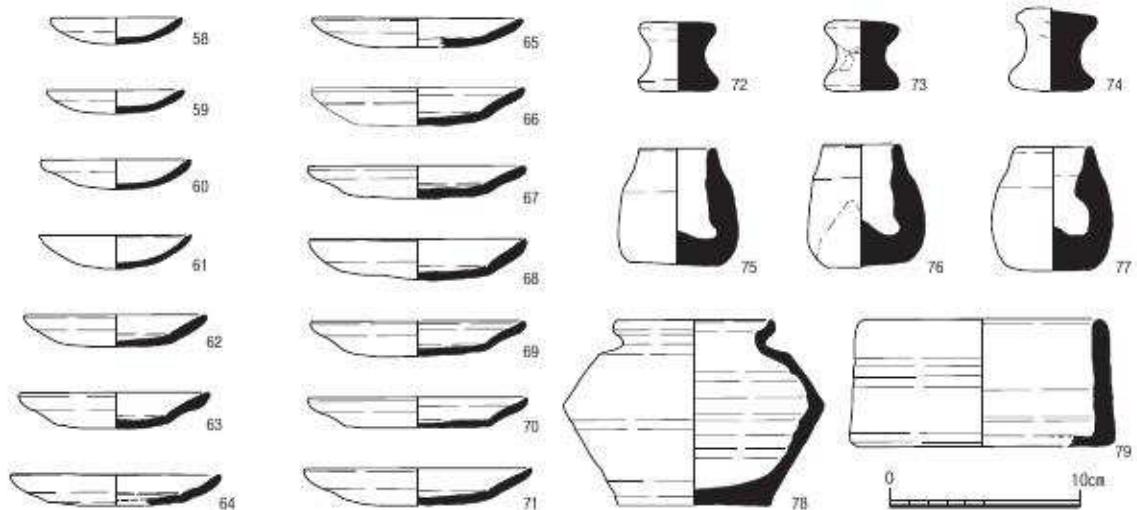


図24 土壌146出土土器実測図 (1/4)

中段階に属す。

水琴窟22 (図22、図版10)

信楽甕 (49) は口径52cm、残存器高51cm（推定51.5cm）である。体部には3ヵ所に粘土の継ぎ目があり、内外面にはハケで鉄泥が施される。江戸時代末期頃と思われる。

土壌26 (図23、図版10・11)

肥前色絵蓋 (50~52)・同小椀 (53)・同急須身 (54)・同染付椀 (55)・同皿 (56)・同鉢 (57)などがある。51・53には同じ丸文が描かれた蓋と椀のセットである。52・54はセットでいずれにも16弁菊文が配されている。56にも内側面に16弁菊文が配されている。これらの16弁菊文入の器は禁裏から肥前への御用品である。57には江戸時代後期に始まった焼継で補修が施されている。

XIV期中段階に属す。



図25 埋納土壌100出土土器実測図 (1/4)

土壌146 (図24)

土師器皿S b (58~61)・同皿S (62~71)・同器台 (72~74)・同塩壺身 (75~77) である。国産陶器は丹波産 (78・79) である。72~74は器高3.7cm、4.4cmの2種類あり、形態は組紐錘に類似しているが灯明皿の台として使われたと思われる。75~77は口径3.8cm、器高6.2~6.5cmで口縁部は直立する。京都産である。78はそろばん玉型の蓋付き小型壺で火消し壺と思われる。79は匣鉢と思われるが花器とて使われた可能性がある。XIII期中段階に属す。

埋納土壌100 (図25、図版10)

土師器壺の蓋 (80)・身 (81) で、80は口径

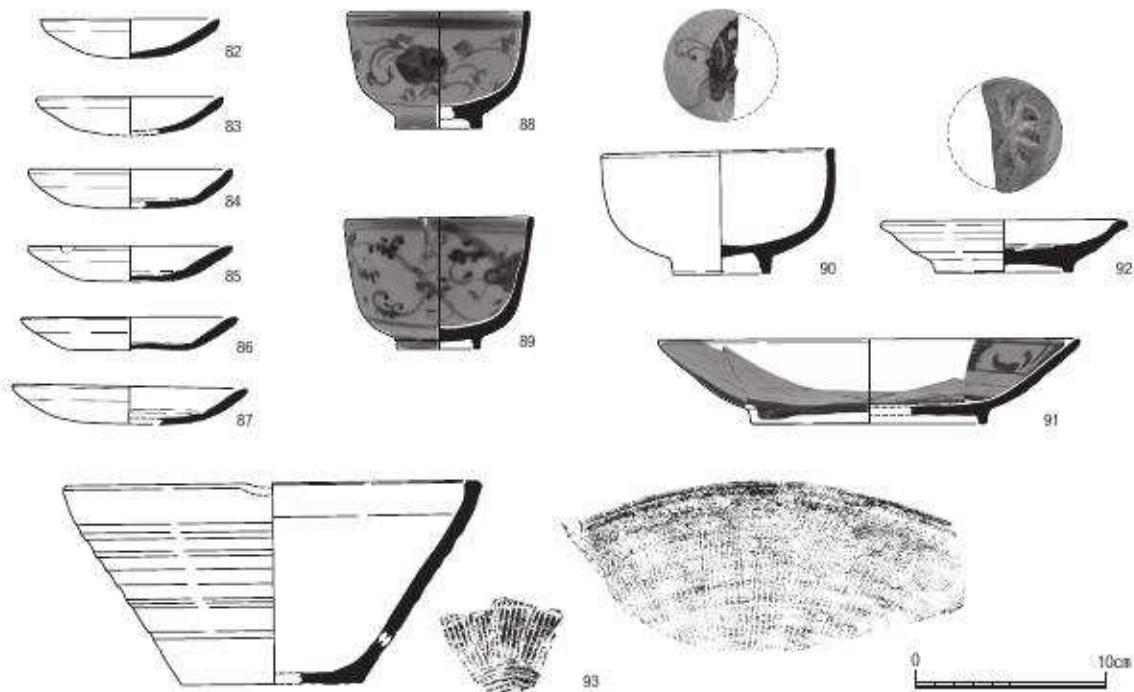


図26 土壌163出土土器実測図 (1/4)

20.6cm、器高4.4cmでつまみが付く。内面に墨書がある。81は口径18.5cm、器高19.3cmである。消壺を転用して胞衣壺に使用したと思われる。据形埋土から「康熙通宝」・「開元通宝」などが出士した。XII期古段階に属す。

土壌163 (図26)

土師器皿S b (82・83)・同皿S (84~87)、肥前染付椀 (88~90)、中国磁器赤絵皿 (91) 国産陶器は瀬戸皿 (92)、焼締陶器は丹波播鉢 (93) などがある。84~87は口径10.7~12.4cm、器高1.8~2.1cmでこの時期の皿Sは器高が縮小し、口縁部は端面を持つものが少なくなり、凹線状圈線が調整痕から付加型へ変わりはじめめる。93は口径21cm、器高11cmと小振りの播鉢である。内面の摺目は一単位7本である。XII期古段階に属す。

土壌201 (図27)

土師器皿S b (94~96)・同皿S (97~100)・土師質鍋 (101) などがある。97~100は口径10.4~11.8cm、器高2.1~2.4cmで口縁部は端面を持ち、凹線状圈線は技法による調整痕である。共伴遺物に古寛永通宝も出土した。XI期中段階に属す。

第2面掘下げ・確認トレンチ2 (図28)

土師器皿S b (102)・同皿S (103)・同皿A c (105)・同皿A (106) がある。102・103とも室町時代後半 (X期中から新段階)

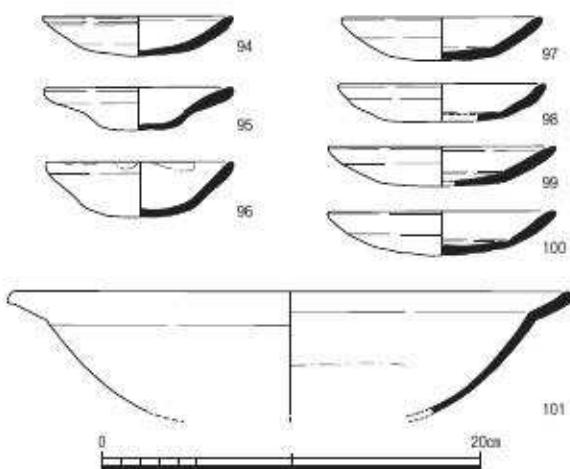


図27 土壌201出土土器実測図 (1/4)

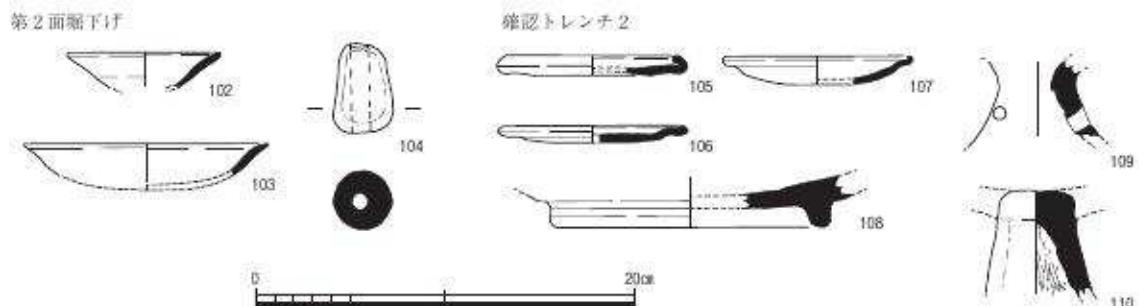


図28 2面掘下げ・確認トレンチ2出土土器実測図(1/4)

に属す。第2面掘下げ出土。104は土師質土錘で、残存長4.8cm、径2.5~3.2cmの弾道形でやや大型である。孔の内面は滑らかで、心棒に粘土を巻き付けて成形される。胎土はやや軟質で灰白を呈している。第2面掘下げ出土。室町時代。105~106は平安時代後期(V期古から新段階)に属す。緑釉陶器皿(108)は高台と底部の一部が残存する。貼付け高台で、内面底部に目跡が見られる。胎土はやや軟質で灰白色、釉は暗オリーブ色を呈する。盤の可能性がある。平安時代前期。確認トレンチ2出土。

弥生土器(109・110)がある。109は器台の筒部から脚部である。筒部は細く、脚部はやや短い。脚部の3ヵ所に穿孔が見られる。胎土はやや硬質で橙色を呈する。110は高坏の脚である。脚は短い。胎土はやや軟質で浅黄橙を呈する。いずれもV様式に属す。確認トレンチ2出土。

瓦類(図29・30)

江戸時代

棟丸瓦

瓦1~2は菊花文の棟丸瓦で周縁を有する。凹線弁8弁の一重菊。瓦1は瓦当径7.6cm、中房径9mmでボタン状。瓦2は瓦当径8.3cm、中房径6mmでボタン状。いずれも当面にキラコが見られる。土壙1出土で江戸時代末期。

瓦3~8は菊花文の棟丸瓦で周縁が無い。瓦3は間弁を配する凹線弁8弁の二重菊で、瓦当径7.6cm、中房は欠損。土壙14出土で江戸時代前期。瓦4は凹線弁16弁の一重菊。瓦当径不明、中房径12mmでボタン状。井戸212出土で江戸時代前期。瓦5は凹線弁16弁の一重菊。瓦当径9.8cm、中房14mmでボタン状。土壙106出土で江戸時代前期。瓦6は凹線弁16弁の一重菊瓦当径9.6cm、中房14mmでボタン状。江戸時代前期で土壙189出土。瓦7・8は凹線弁8弁の一重菊。瓦7は瓦当径9.1cm、中房13mmでボタン状。瓦8は瓦当径9.1cm、中房14mmでボタン状。いずれも凹線が太い。井戸212出土で江戸時代前期。

軒丸瓦

瓦9は右巻込みの三巴文軒丸である。珠文は15個、瓦当径16.2cm。土壙146出土で江戸時代中期。

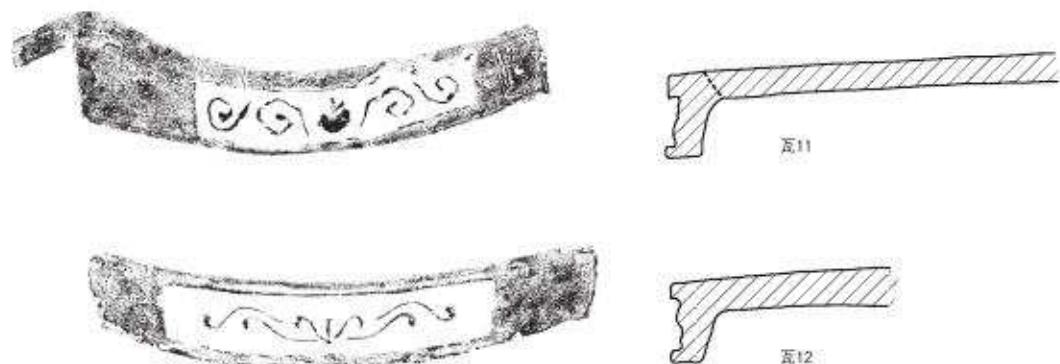
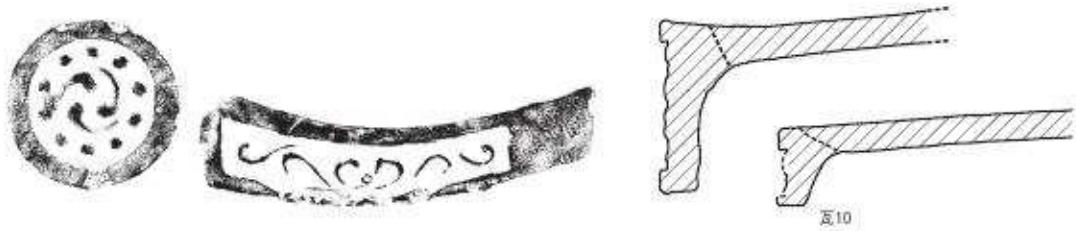
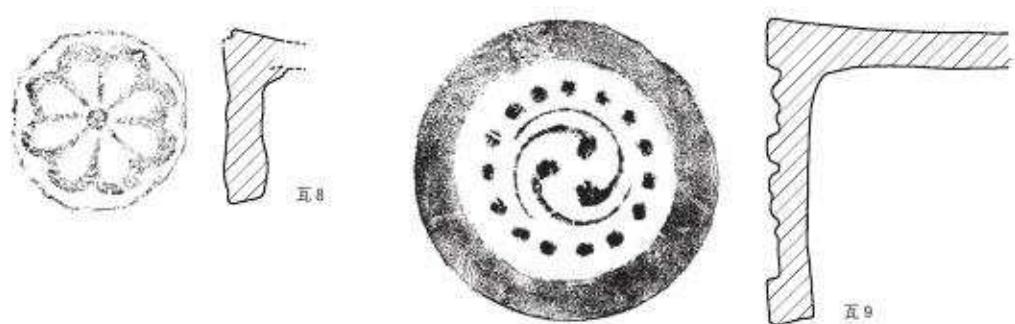
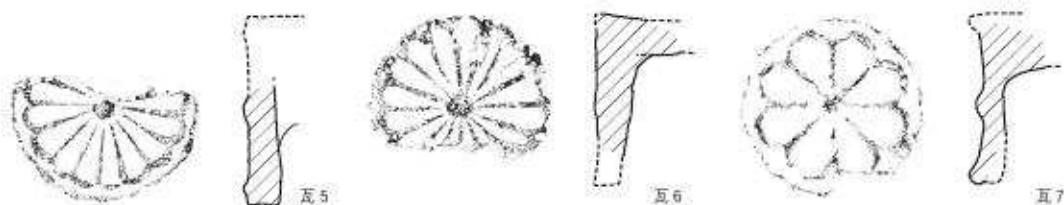
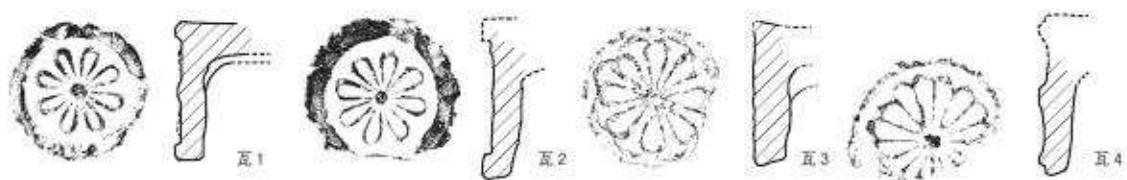


図29 棟丸・軒瓦・軒棟瓦拓影・実測図 (1/4)

軒棧瓦

瓦10は軒棧瓦で、丸瓦当は右巻込みの三巴文、珠文が10個、平瓦当は均整唐草文である。当面にキラコが見られる。土壤26出土。江戸時代末期。瓦11は丸瓦当が無い軒棧瓦で、均整唐草文で中心飾りは宝珠飾り。瓦当面にはキラコが見られる。左周縁に長方形の圈線内に「□□□□ 助□□門」の人名の刻印がある。土壤14出土で江戸時代末期。

軒平瓦

瓦12は均整唐草文である。土壤46出土で江戸時代中期。

平安時代

軒丸瓦

瓦13は複弁6葉蓮華文である。中房には圈線があり、右巻込み二巴文が配される。複弁の弁は接しない。同文のものが平等院で収集されている。^{井7}河内産。確認トレンチ2出土で平安時代後期。

軒平瓦

瓦14は唐草文である。界線があり、唐草文が連続する。確認トレンチ2出土で平安時代後期。

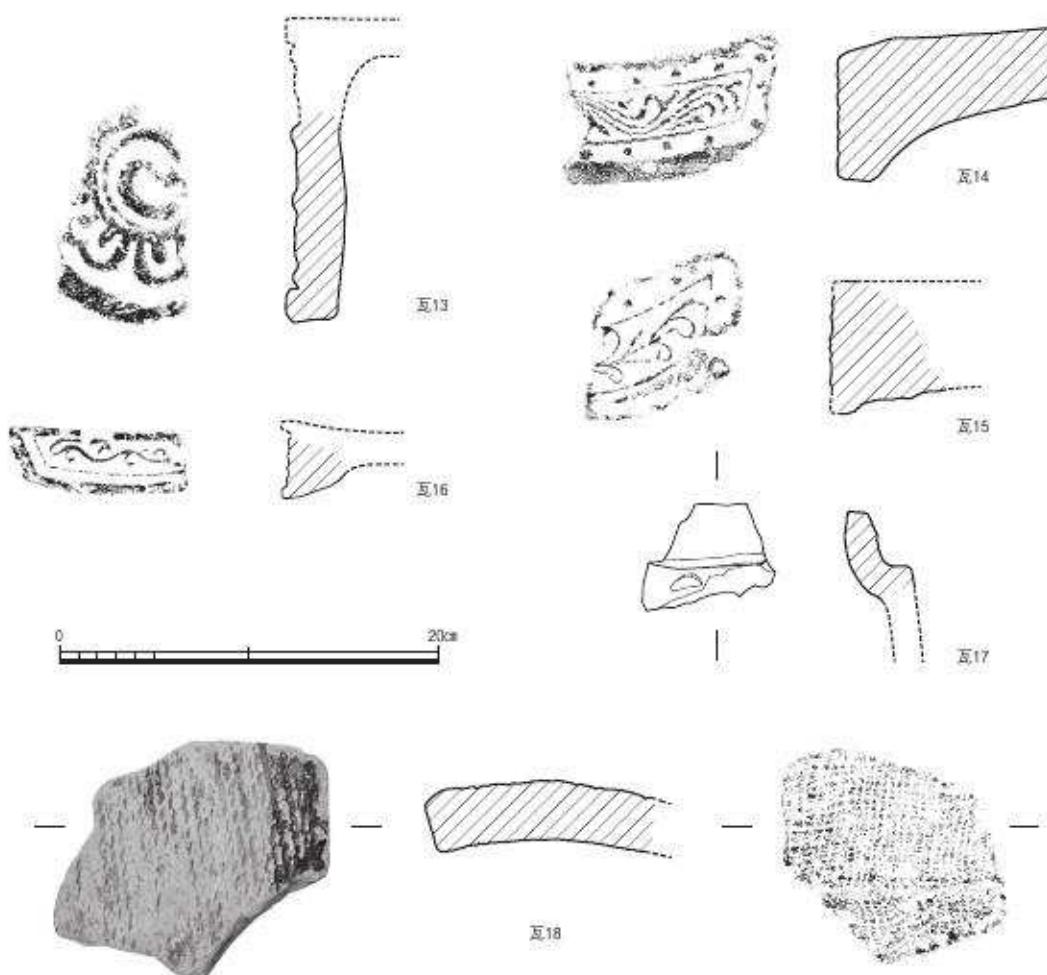


図30 軒瓦・丸瓦・駕斗瓦拓影・写真・実測図 (1/4)

瓦15は均整唐草文である。唐草文は連続して反転する。外区は珠文が巡る。栗栖野瓦窯。確認トレンチ1出土で平安時代中期。瓦16は均整唐草文である。唐草文が連続している。外区は珠文が巡る。大和産。確認トレンチ1出土で平安時代後期。

緑釉瓦

瓦17は丸瓦で、玉縁と側面の一部が残存している。釉は凸面と側面に残る。凸面はナデ調整。凹面には布目。胎土はやや軟質。にぶい橙色を呈する。瓦18は熨斗瓦である。側面と先端面が残存している。釉は側面・先端面・凹・凸面に見られる。凸面は縄目タタキ、凹面は粗い布目である。いずれも法成寺のものと推定される。確認トレンチ2出土で平安時代中期。

その他の遺物

銭貨（図31）

銭貨は判読できないものと破片を含めて22枚出土した。内容は国内銭のうち寛永通宝が19枚で銭貨2～19は寛永12年（1635）铸造の水戸銭である。渡来銭は唐の武徳4年（621）铸造の開元通宝（21）が1枚、清の康熙元年（1662）铸造の康熙通宝（20）が1枚。不明が1枚である。

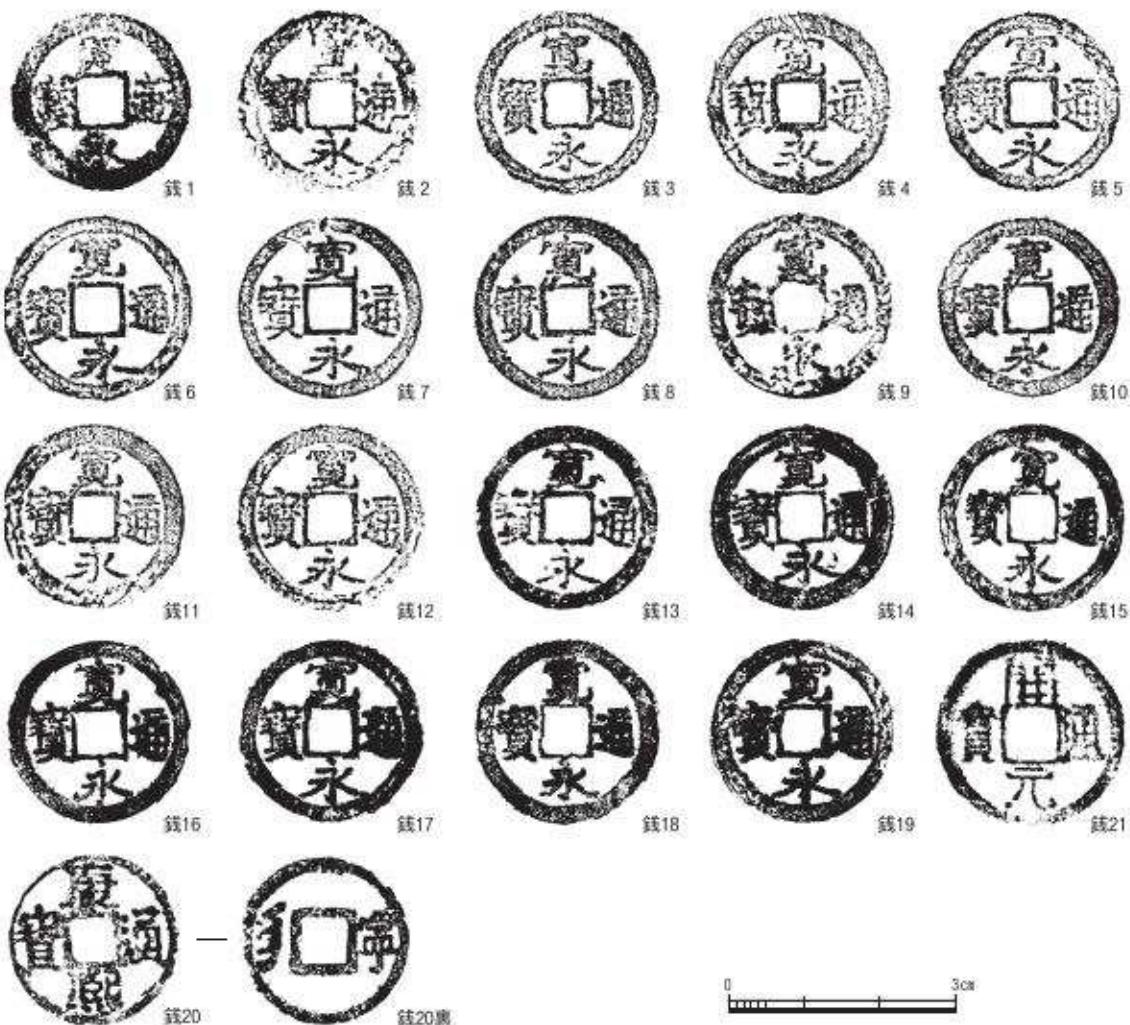


図31 銭貨拓影図（1/1）

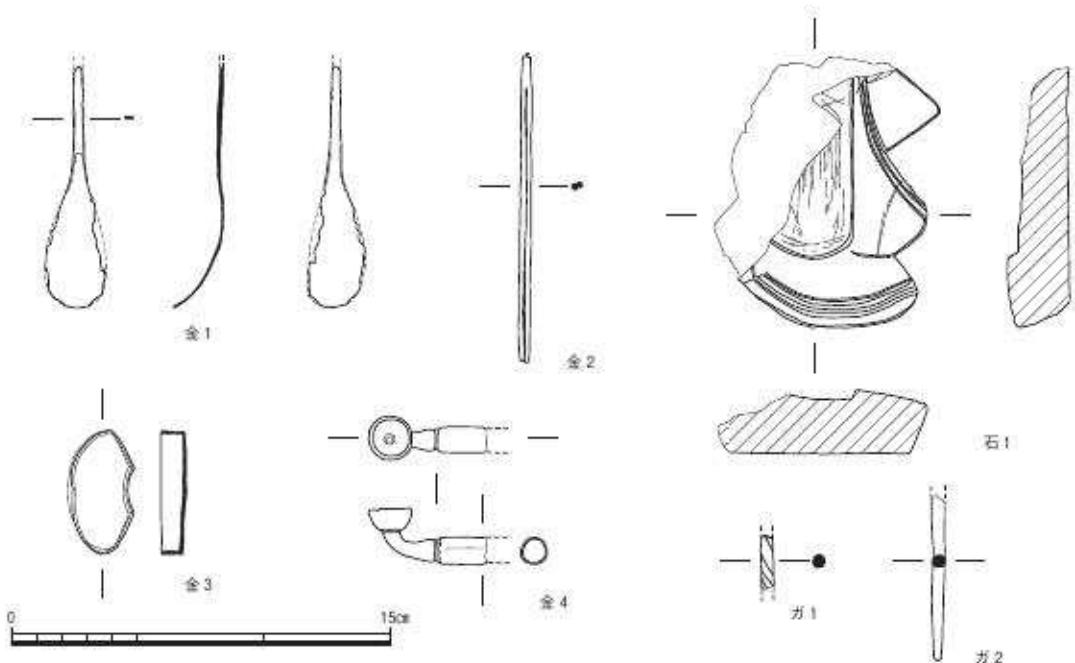


図32 金属・石・ガラス製品実測図 (1/3)

金属製品・石製品・ガラス製品 (図32、図版11)

金属 1 匙でにぎり部は欠損している。残存長は9.5cmである。銅製で土壌26出土。

金属 2 簪で上部は欠損している。残存長は13.2cmである。銅製で土壌14出土。

金属 3 引手金具で長軸は4.9cm、短軸は2.7cm、深さ1.0cmで扇状を呈している。銅製で土壌26出土。

金属 4 煙管で火皿から首部である。脂返しが湾曲していることから17世紀後半から18世紀前半ものと考える。埋納土壌100出土。

石製品 1 陸部側の右下部が残存している。天神、姫、小野道風などの人形に模した嵯峨硯である。残存している顔料から姫形の硯と思われる。材質は珪質頁岩。土壌14出土で江戸時代末期。

ガラス 1 髪飾りの先端部で2.5cm程が残存している。浅い青色を呈している。土壌26出土で江戸時代末期。

ガラス 2 髪飾りで2.1cmが残存している。棒状をねじって螺旋状にしている。暗青灰色を呈している。土壌14出土で江戸時代末期。

IV. まとめ

今回の調査成果は、寺町旧域において江戸時代前期から末期の宅地変遷と法成寺跡流失の一端を明らかにすることことができた。

寺町旧域の遺構は、絵図資料と比較して時期ごとに記述する。

江戸時代前期（17世紀前半～後半）の遺構 第2面の東西塀3、井戸212、埋納土壙100、土壙163・201などである。この時期に該当する絵図は、寛永14年（1637）『洛中絵図』（図33）と延宝5年（1677）『新改内裏之図』（図34）である。図33では、調査地は「清和院」と「智恩寺」の境界付近に位置している。図34では、調査地は「新道」（現広小路通）、「女院御所様」（知恩寺が移転した跡地）に位置する。図34は、寛文13年（1673）の火災後、公家町内が延焼を防ぐために区画整備された絵図である。御所側と同幅の新道を造るために「清和院」は移転する。図33・34でも「知恩寺」、「女院御所様」の敷地は同位置にあることが見取られ、塀3は「智恩寺」、「女院御所様」の北敷地境界の塀と考えられる。検出した遺構の時期から埋納土壙100と井戸212は「清和院」、土壙201は「智恩寺」、土壙163は「女院御所様」に属す。しかし、新道の路面などの遺構は検出できなかった。

江戸時代中期（18世紀前半～後半）の遺構 第2面の南北塀1・2、集石219、井戸233である。この時期に該当する絵図は、図35と図36の『増補再版京大絵図』寛保元年（1741）である。図35では、宅地が東西に2分割されて東側が「正親町殿、西側が百万遍屋敷（調査地）」となり、北側の敷地と南側の敷地が拡張され新道側へ迫り出して道路が狭くなっている。図36では、3分割となり東から「正親町殿、葉室、百万遍屋敷」となっている。塀1・2の時期から「葉室」の敷地境界と考えられ、塀1の東が「正親町殿」、塀2の西が「百万遍屋敷」と推定される。

江戸時代後期～末期（18世紀後半～19世紀中頃）の遺構 第1面の集石10・88・92、土壙14・26、水琴窟22、井戸25、石敷45、雨落ち溝54である。この時期に該当する絵図は、天明8年（1788）の天明火災後と推定される図37の『京大内裏図』と図38の天保8年（1837）『天保八年補刻 禁闕内外全図』である。図37では、敷地は均等に3分割され、「高橋」と「藤嶋」に変わっている。図38では、西側敷地は町屋に変わっている。敷地全体が北側へ上がり、新道（広小路通）が更に狭くなり、街区区画が現在に近いものとなっている。調査地は土壙26の東端（Y=-21,158）を境に東が「正親町殿」で西側が「高橋」となり、「高橋」の敷地は西側へ拡張されたと推測される。土壙14、井戸25は「正親町殿」に属し、それ以外の遺構は「高橋」側に属すものと考えられる。また、「高橋」側で検出した水琴窟、集石、雨落ち溝、石敷などの遺構や茶道具などが出土しており、宅地内が「露地」庭園であった様相を窺うことができる。

法成寺跡の流失について 今回の調査は、法成寺の遺構検出が目的であったが、室町時代後半以前の鴨川の氾濫堆積を確認するにとどまった。



図33 「洛中絵図」寛永14年（1637） 京都大学附属図書館所蔵



図34 「新改内裏之図」延宝5年（1677）

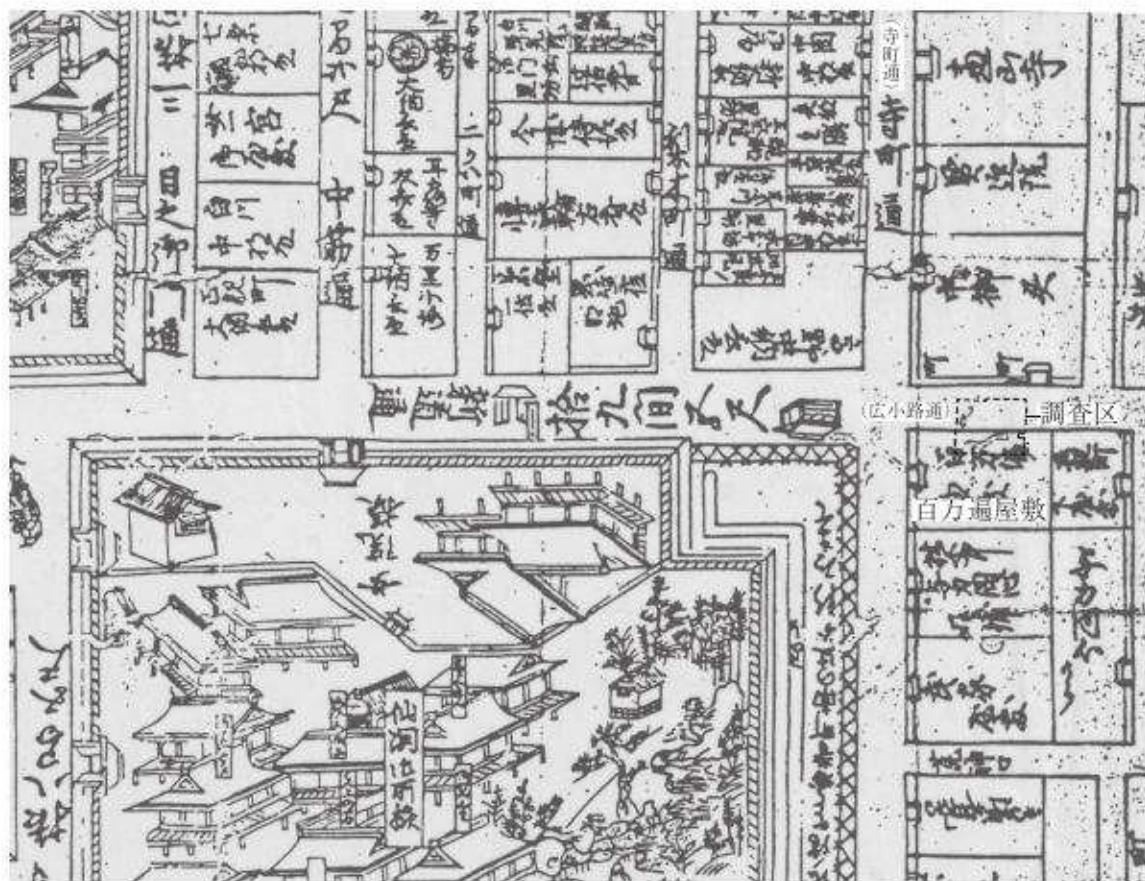


図35 「新板増補京絵図新地入」宝永6年（1709）



図36 「増補再版京大絵図」寛保元年（1741）

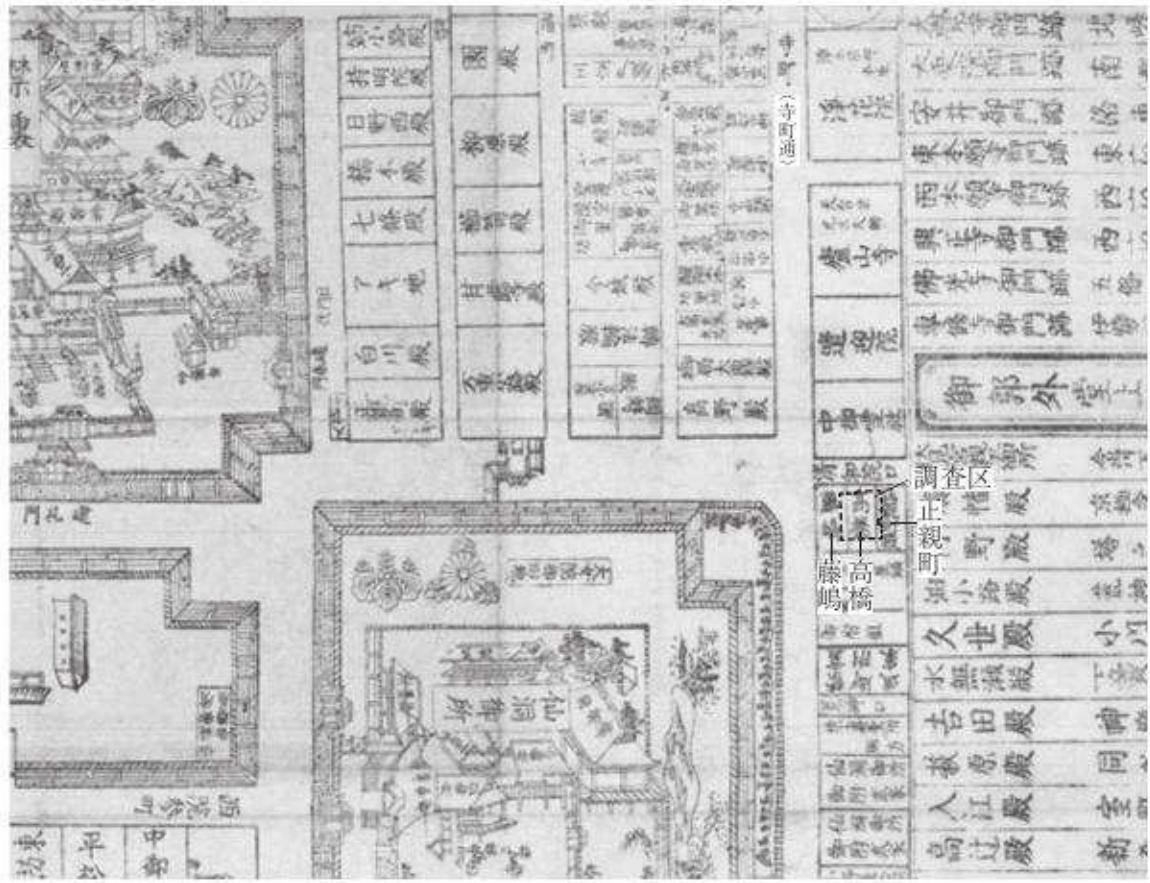


図37 「京大内裏絵図」天明火災後（1788以降） 京都大学附属図書館所蔵



図38 「天保八年補刻 禁闈内外全圖」天保8年（1837）

この様な洪水痕跡は調査地周辺の発掘調査でも確認されている。法成寺は「徒然草」が書かれた頃には、わずかであるが無量寿院の丈六の仏九軸と法華堂が残っていると記述されている。そして、正慶二年（元弘三年：1333）に無量寿院が焼失した記載あり、この頃までは姿をとどめていたようである。これ以降に、法成寺の遺構は鴨川の氾濫によって流失したもと思われる。

正慶2年（1333）から天正17年（1591）までおこった鴨川の洪水は、延文元年（1356）、永徳3年（1383）で鴨川や諸河川洪水、四条・五条両橋が流失、永享8年（1436）、喜吉元年（1441）、文安5年（1448）、長祿3年（1459）、文明7年（1475）、文明18年（1486）、文亀2年（1502）、永正7年（1510）、大永4年（1524）、享禄3年（1530）、天文8年（1539）、天文13年（1544）、天正6年（1578）、天正9年（1581）などがあり、鴨川の洪水で四条・五条両橋などが流失している。天文13年（1544）の洪水では禁中に浸水し、築地が破損した記載がある。^{註11} 1300年代は比較的洪水の少ない期間であるが1400～1550年間は洪水の発生回数の多い期間である。法成寺の遺構がいつの時期に流失したかは特定することは出来ないが、2面掘下げで出土した土器はⅣ期中から新段階（1530～1580頃）に属してゐるため、この時期の洪水で流失した可能性がある。

また、寺町通が加茂川、鴨川に沿って五条まで造営されたのが鴨川の氾濫を洛中に侵入させないためであり、堤防の役割があったことが解る。

今回の調査で遺構は検出できなかったが法成寺で用いた緑釉瓦などが出土しており、調査地が法成寺跡であることは明らかである。

以上が今回の調査成果である。今後も継続して周辺調査が必要である。

参考資料

『京都の大路小路』小学館 1994年 『日本歴史地名体系27京都市の地名』平凡社 1979年

『平安時代史辞典』角川書店 1994年

註

註1 杉山信三『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年

註2 仲 隆裕「浄土庭園について」「浄土庭園と寺院記録集」永福寺創建800年記念シンポジウム 鎌倉市教育委員会 1997年

註3 李 永一（日本地学研究会会員）が組成分類を行った。

註4 横山卓雄『西南日本の自然史』過去2000万年間にわたる自然の移り変わり 三和書房 1983年 p.148

註5 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年」「研究紀要」第3号 （財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年

小松武彦「近世の土師器」「平安京左京北辺四坊」第2分冊（公家町） 京都市埋蔵文化財研究所 発掘調査報告第22冊 （財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年

註6 鈴田由紀夫「京都と伊万里焼」「冷泉家展」近世公家の生活と伝統文化 （財）冷泉家時雨亭文庫、朝日新聞、（株）アサツーディ・ケイ

- 註7 「木村捷三郎収集瓦図録」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 註8 「平安京左京北辺四坊」第1分冊(公家町形成前) 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告第22冊
(財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 註9 図33「洛中絵図」「中井家絵図」、図37「内裏図」は京都大学附属図書館所蔵、図34「新改内裏之図」、図35「新版増補京絵図」、図36「増補再版京大絵図」、図38「天保八年補刻 禁闇内外全図」は京都市史 地圖編 京都市役所 1947年
- 註10 「寺町旧域・法成寺跡」平成27年度調査現地説明会資料 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2015年5月30日
- 註11 中島暢太郎「鴨川水害史」「京都大学防災研究所年報」第26号 京都大学防災研究所 1983年
高木勇夫「明治以前日本水害年表」「慶應義塾大学日吉紀要」社会科学 No.14 慶應義塾日吉紀要刊行委員会 2004年
河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地盤変化」「京都歴史災害研究」第1号 立命館大学歴史都市防災研究所 2004年
河角龍典「京都歴史災害年表」「京都歴史災害研究」第6号 立命館大学歴史都市防災研究所 2006年
「第十卷 年表・辞典」「京都の歴史」1976年 京都市史編さん所

報告書抄録

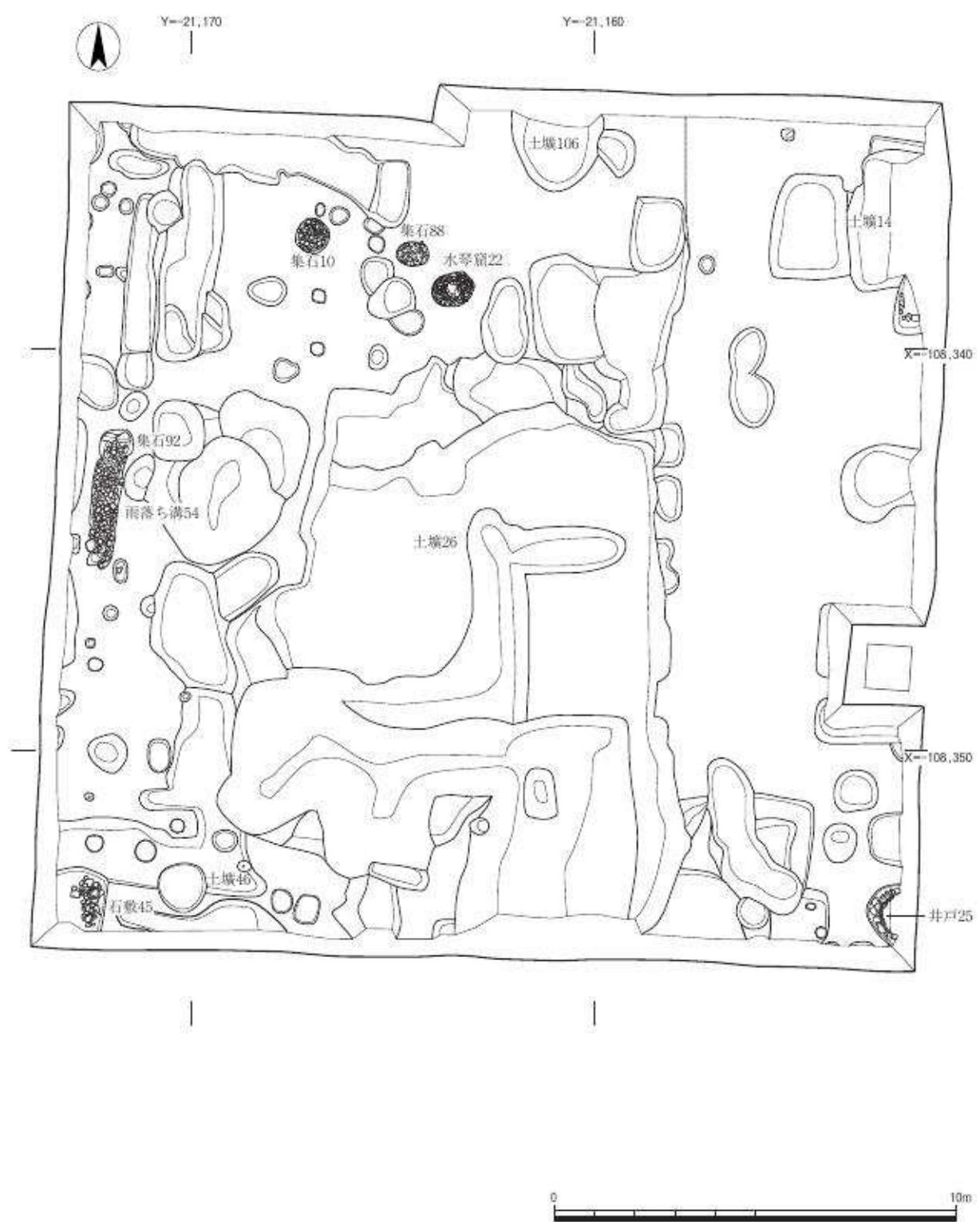
あたりがな	てらまちきゅういき・ほうじょうじあと
書名	寺町旧域・法成寺跡
副書名	東桜町の調査
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小松武彦
編集機関	古代文化調査会
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
発行年月日	西暦2016年3月31日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寺町旧域 法成寺跡	京都市上京区 寺町通広小路 下る東桜町9	26100	170 242	35度 1分 23秒	135度 46分 5秒	2015年3月 18日～2015 年6月23日	462m ²	建物新築 工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺町旧域 法成寺跡	都城跡 寺院跡	平安時代～ 室町時代後期	洪水堆積	土師器、綠釉陶器、 灰釉陶器、輸入磁器、 須恵器、焼締陶器、 軒瓦、綠釉瓦	室町時代以前の鴨川の 洪水痕跡 江戸時代前期～中期堀 跡、井戸
		江戸時代 前期～中期	堀、井戸、土壤、 ピット、集石	土師器、国産陶磁器、 輸入磁器、焼締陶器、 軒瓦、瓦、錢貨	江戸時代後期から末期 の集石、井戸、水琴窟、 雨落溝
		江戸時代 後期～末期	井戸、集石、石敷、 雨落溝、水琴窟、 土壤	土師器、国産陶磁器、 軒瓦、瓦、錢貨、金 属製品、石製品、土 製品、ガラス	

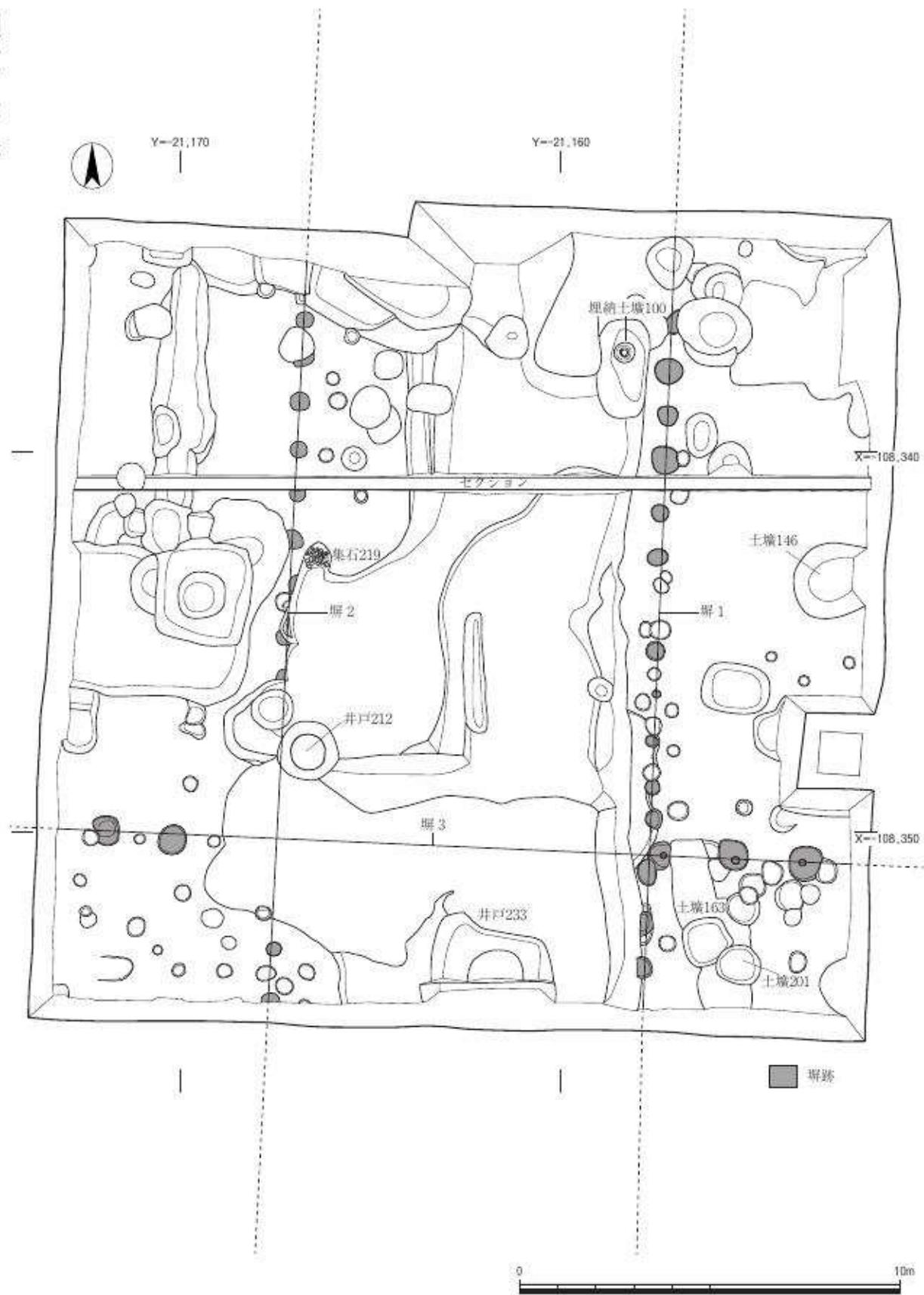
図 版

図版一
遺跡



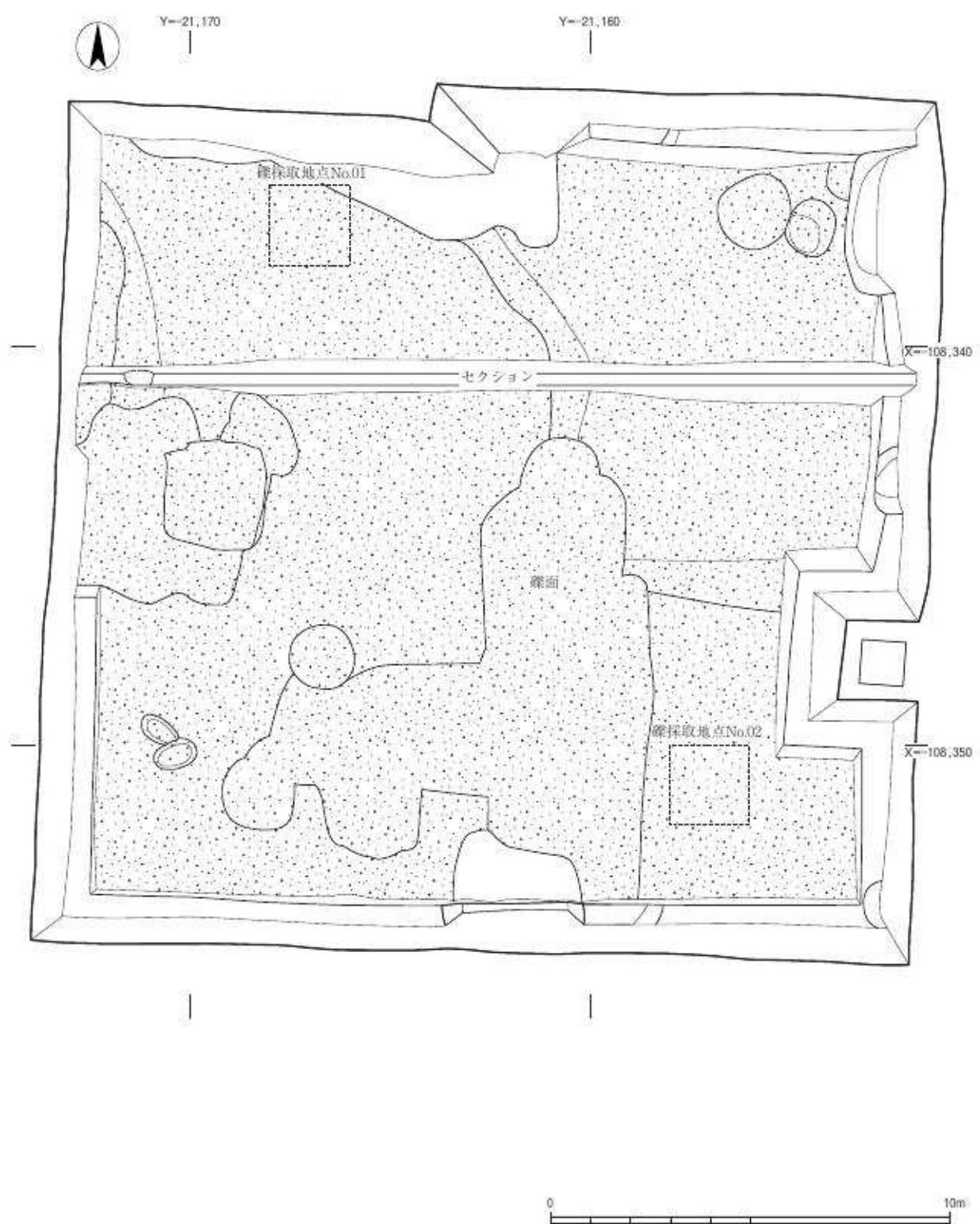
第1面遺構実測図 (1/150)

図版二
遺跡

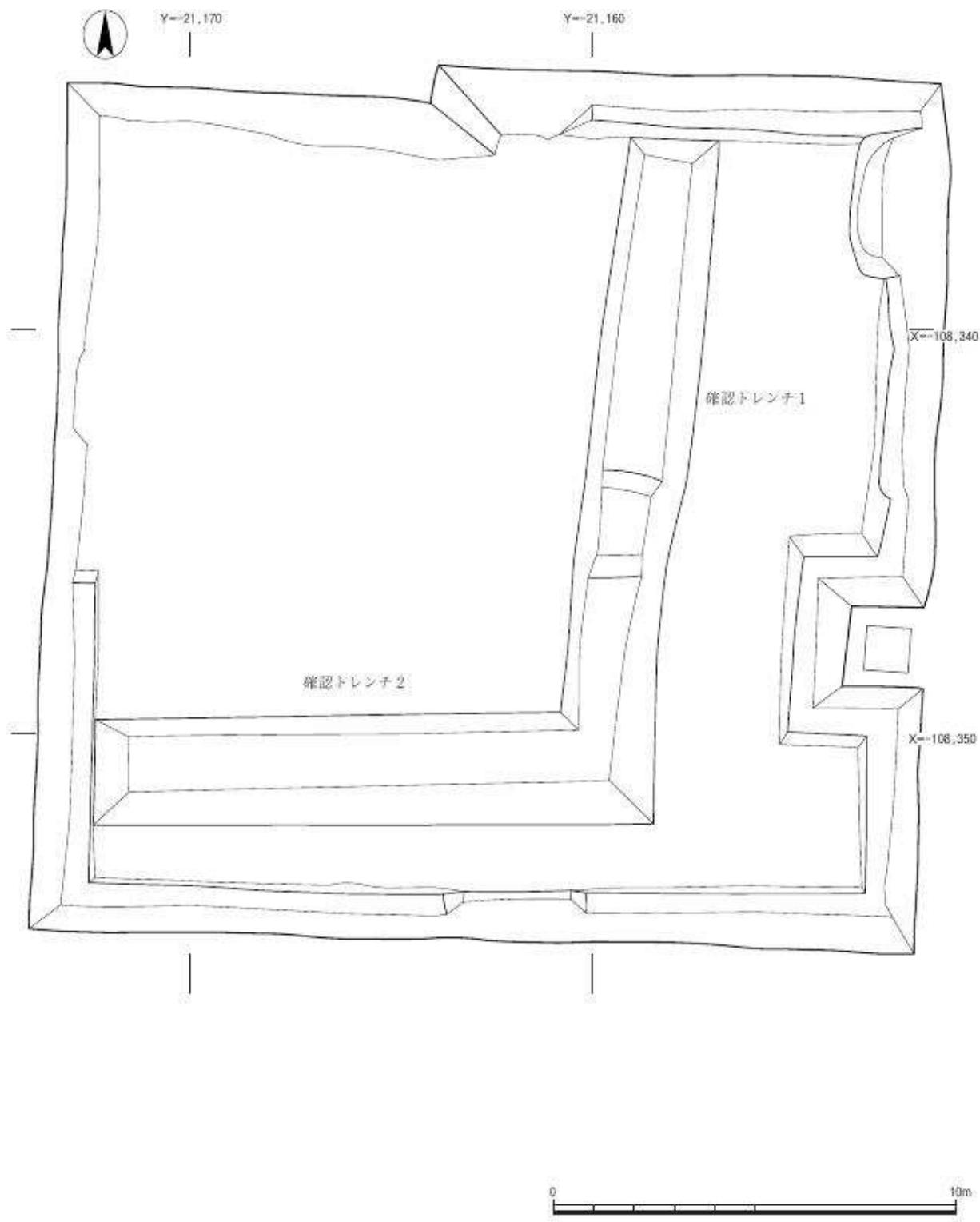


第2面遺構実測図 (1/150)

図版三 遺跡



第3面遺構実測図 (1/150)



確認トレンチ1・2位置図 (1/150)



1 第1面全景（北東から）



2 第2面全景（北東から）



1 第3面全景（北東から）



2 確認トレンチ全景（北西から）



1 集石10（北から）



2 水琴窟22（北から）



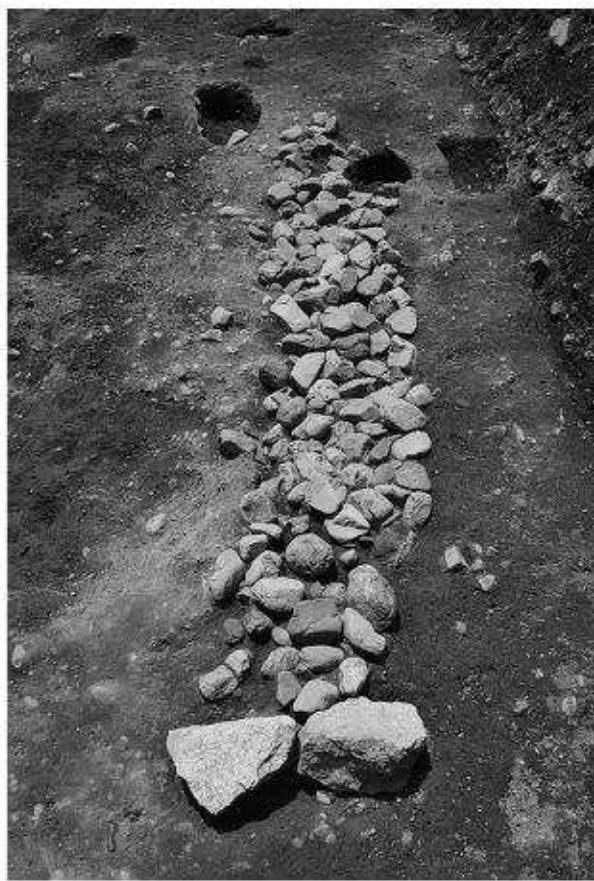
3 集石88（北から）



4 水琴窟22断面（南から）



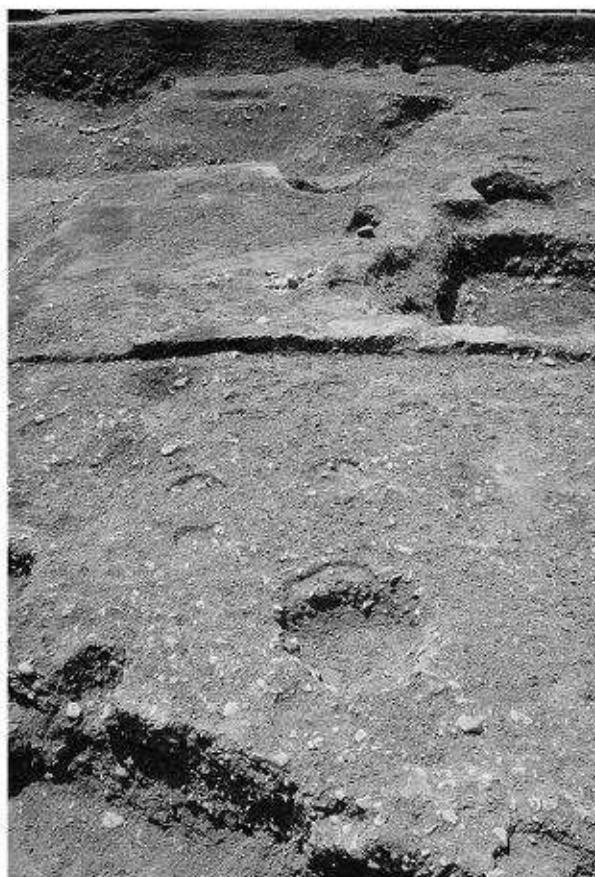
5 石敷45（北から）



6 雨落ち溝54・集石92（北から）



1 墓 1 (北から)



2 墓 2 (北から)



3 墓 3 (西から)



4 柱穴112 (南から)



5 柱穴120 (南から)



1 埋納土壙100断面（南から）



2 土壙201の銭貨出土（南から）



3 井戸212（北から）



4 集石219（南から）



5 確認トレンチ1（北から）



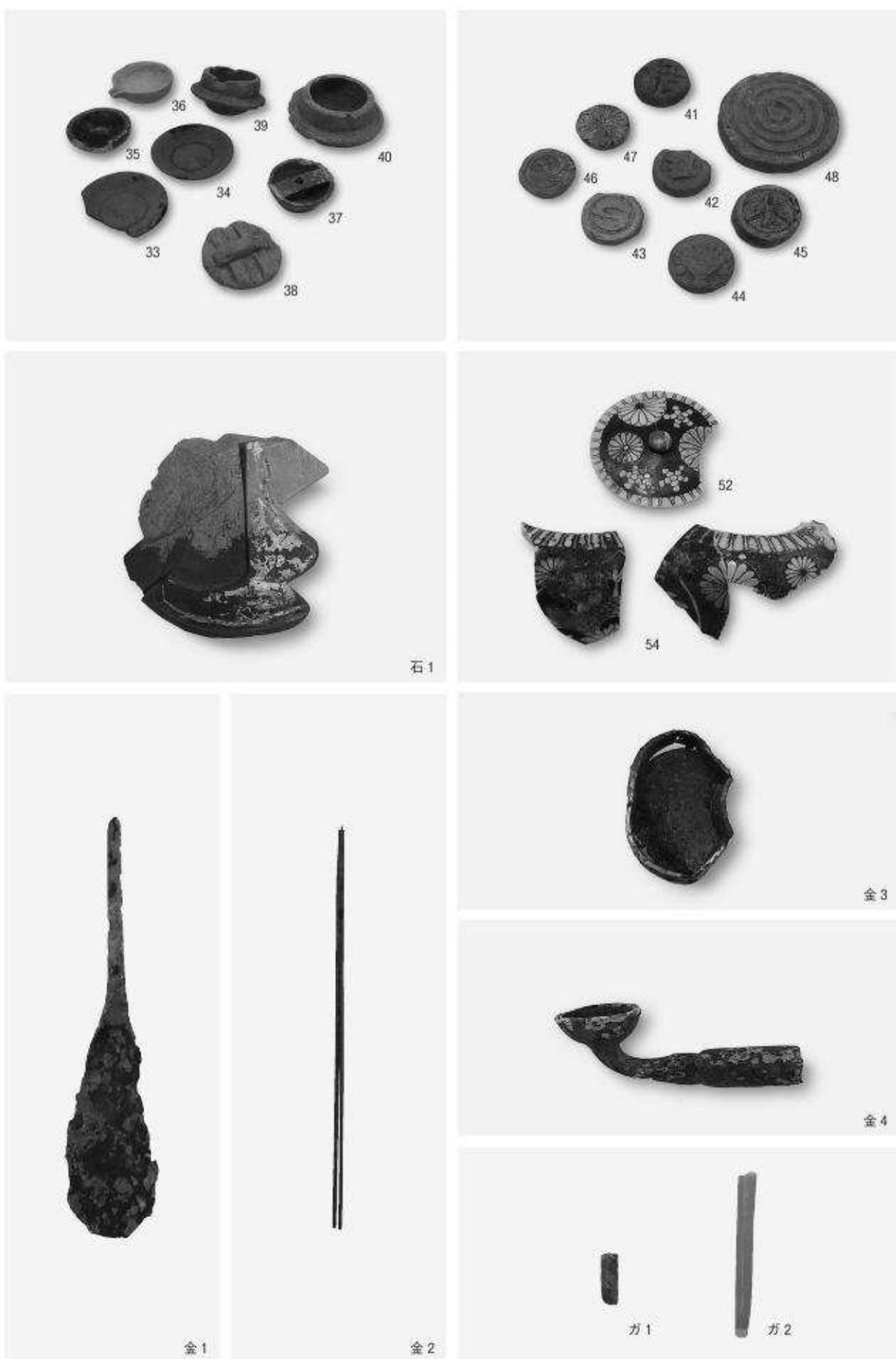
6 確認トレンチ1東壁断面（西から）



7 確認トレンチ2南壁断面（北から）



土壤14 (10・24・32)・水琴窟22 (49)・土壤26 (51・53・56・57)・埋納土壤100 (80・81)



土壤14(39~48・金3・石1・ガ2)・土壤26(52・54・金1・2・ガ1)・埋納土壤100(金4)

寺町旧域・法成寺跡

—東桜町の調査—

発行日 2016年3月31日

編集
発行 古代文化調査会

住 所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
TEL (078)857-6368

印 刷 真 鐵 社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034

